

経験と結び付けて考えるのは、ごく当然である」と述べているように、パリーノウド二篇を、シドニー自身のロマンスに対する結語と見なそうとする傾向は強いように思われる。

しかし、それら二篇のソネットは、第一義的には、『短詩選集』で描かれている恋愛の「取消しの詩」であることは確かであり、その意義はまずその作品のコンテクスト中で議論されるべきであろう。それを更に拡大して、シドニー自身のロマンスに対する終局的態度としてよいかどうかは、『アストロフェルとステラ』で描かれている恋愛の緻密な考察を通して検討し直すべき課題と言えよう。

\* 翻訳の底本には、William A. Ringler ed., *The Poetry of Sir Philip Sidney*: Oxford: Clarendon Press, 1962 を利用し、Katherine Duncan-Jones ed., *Sir Philip Sidney: Selected Poems*: Oxford: Clarendon Press, 1973 及び同じ編者の、*Sir Philip Sidney: A Critical Edition of The Major Works* “The Oxford Authors”: Oxford: Oxford Univ. Press, 1989 を補った。それぞれの注釈にはお世話になった。

彼女の誇りを回復してやる。しかし、それは単に最初の即自の状態に戻ることを意味しない。第九番や第十番のソネットでの対自的な緊張関係を経ている以上、更にそれをも含んだ即自対自の境地に進まなければ意味がない。この詩の結びの二行連句の

だが彼女はこう考える、我々の苦痛は高貴な理由が正当化するが、  
苦痛を支配すべき彼女を、偽りの苦痛が辱めている、と。

という言葉は、単に称讃の言葉でもなければ、また単に批判の言葉でもない。詩人が味わっている苦痛は彼女の美しさによるものであるから已むをえぬ、という容認とともに、彼女が偽りの苦痛に恥ずかしめられている、という彼女の真の苦痛の把握がここにある。詩人は、彼女の苦痛についての真実の認識に達したのである。

右のような相手の心の苦しみの正しい認識というものが、もし愛と呼びうるなら、それはミルトンの大天使用ラファエルがアダムに勧める理性の基盤の上に置かれた愛であり、そこに墮落はありえないと考えられ

る。この『短詩選集』の最後において、いわゆる世俗的恋愛の欲望が否定されて、永遠の愛を求めるパリノウドが置かれる素地は、以上で紹介した「苦痛」に就いての四つのソネットの中にも見ることができであろう。

当のバリノウド二篇には、「欲望よ、お前は余りにも長く私を眠らせた」、「此の世よ、さらばだ、私にはお前の限界が見えた」などの、回顧的で決定的な言葉が含まれており、更にその後には“*Splendidis longum valdeico mgis*”（華やかな瑣末事に永遠の別れを告げる）が付されていることから鑑みて、「欲望」、延いては「人生」に対するシドニーの終局的な態度を示すものとしてしばしば引用され、例えば、一九世紀のシドニー詩集の編者A・B・グロザートも、『アストロフェルとステラ』の結尾に相応しいソネットとして、それらの二篇を第一〇九番、第一一〇番として印刷した。

このグロザートの処置には異論があり、それを踏襲する版はないが、名著『エリザベス朝の恋愛ソネット』の著者J・W・リーヴァも、グロザートの感傷性を批評しながら、「それでも、これらのソネットの主題を、愛のソネット集『アストロフェルとステラ』の中心的

四篇の連結ソネットの最後の詩では、貴婦人の顔に宿った苦痛への感情移入はない。それは単なる肉体的苦痛と見なされている。そして、その肉体的苦痛と、詩人が彼女から受けている精神的苦痛との、どちらが耐えがたいと彼女は思っているのか、という主旨の質問が冒頭から畳みかけられていく。これは、前の詩における苦痛を盾にとつての皮肉による攻撃を受け継いだものといえる。そして前よりもより直接的で、痛烈であるように見える。どうも、彼女は僕の精神的苦痛よりも、その肉体的苦痛の方を耐えがたいと思つていようだ。それはけしからぬ、という底意をもつた質問である。

しかし、このような質問による貴婦人の冷酷さへの非難が、この詩の眼目となつていないことは明らかである。これは言わば故意の難題であり、それを押し進めれば、恋愛関係の破綻に通じるからである。例えば、貴婦人が、あなたの精神的苦痛よりも私の肉体的苦痛の方が耐えがたいと言えば、彼女は彼の精神的苦痛の原因である自分の美しさを貶めることになる。また、精神的苦痛の方が耐えがたいと言えば、そのような侮辱を受けながらも、詩人に同情し、その求愛に応

えねばならない。結局、貴婦人のとるべき道は、その質問を無視し、詩人から離れる他ないであろう。

したがって、詩人は、このような質問による攻撃がこの詩の目的にしているのでなく、詩の後半で示されている態度の転換の踏み台にしているのである。前の詩では、その転換は最後の二行句でとつさの機転で起こるのに、この詩では、それが早くも九行から起こっていることから、それが察せられる。そしてその転換は、読者の意表をつきながら、しかも真実を目指す鮮やかな転換と評せる。

いや、いや、彼女は賢くて、よく知つている、自分の顔は、それが他人に与えているほどの苦痛をもたないことを。彼女は知つている、その完全な場所の病気は、それでも、私の生命を救えるほどの健全さをもつことを。

これは、言うまでもなく、ソネット第八番で描かれている、そしてより内面化された彼女である。詩人は、自分の質問に対し、彼女に答えさせることをせず、自ら最初のソネットの世界——「彼女は更に愛する人の目を惹き、お前は更に憎しみを買おう」——に還つて

撃したのち、身をひるがえして相手との関係を回復する。

もしそうなら、ああ、あの部分が災いを受けている間は、

彼女の舌を止めてくれ、これ以上「いや」と言わないように。

「もしそうなら、ああ」と、自分の皮肉に自ら水をさし、次に、苦痛が彼女の顔に宿っている間は、せめて求愛に対する「否」を言わせないうれと、言わば宮廷風恋愛の常套的文句で、恋愛の破綻とともに、詩の破綻をも防いでいると思われる。

しかし、右の結びにおける関係回復は、完全なものではなく、とっさの機転によるその場しのぎという印象は避けがたい。結びの二行句とそれ以前の一二行との内面的結びつきに乏しいからである。その点、質問による攻撃という手法を受け継ぎながら、それに終始せず、その答えが見事な関係回復となっている次の第一一番のソネットは、起承転結の結に当たる詩に相應しいと言える。

彼女が「おお、惨酷な苦痛よ」と言うのを聞いたが、

彼女は、自分の美しさがどんな姿をしているか、知っているのか。

彼女は本当に嘆いていて、他人は偽って嘆くと思っているのか。

か。

彼女は感じることを恐れるが、他人の恐れは感じ取れないのか。

か。

それとも、心は全ての苦痛に耐えうろと思っているのか。

重い大地は嘆くことができるが、燃える心はそれができない

と、

眼は、血の涙を流して、心よりも、ひどく泣けると、

感覚は、感覚を包んでいるもの以上に感じうろと思っている

のか。

いや、いや、彼女は賢くて、よく知っている、自分の顔は

それが他人に与えているほどの苦痛をもたないことを。

彼女は知っている、その完全な場所の病気は、

それでも、私の生命を救えるほどの健全さをもつことを。

だが彼女はこう考える、我々の苦痛は高貴な理由が正当化する

が、

苦痛を支配すべき彼女を、偽りの苦痛が辱めている、と。

すなわち、苦痛が彼女の顔にとりついているのは、苦痛自身の意図というよりは、彼女の美しさに対する、また彼女の冷酷さに対する、神々の嫉妬、あるいはたたりではないか、という皮肉である。詩人は、苦痛を盾にして、愛人の冷酷さに一矢を報いている。

このような、感情移入した客観的事物への質問の形をかりて皮肉の矢を放つ手法は、『アストロフェルとステラ』の月に呼びかけるソネット三一番において典型的に見られる。ここでは、月に感情移入してそれと同僚のよしみを結んだアストロフェルが、「天上の美女たちも、この地上と同じく、高慢なのであるうか」との質問をする。それによって、彼は、この地上の美女たち、とりわけステラに対して皮肉を言っているのであるが、『短詩選集』におけるこのソネットも同工異曲である。この点について、ルーデンスタインが次のように述べているのは、けだし卓見というべきであろう。

『短詩選集』の中の苦痛についての抒情詩と同じく、アストロフェルのソネットは、詩人が愛人に対して

攻撃を行うのに便利で、かつ効果的な道を提供する位置に向かって遠回しに動いてゆく。それを読み返してみると、すべての言動は、この全体的な戦略上の目標によって決定されているように思われる。

——Rudenstein, p. 230.

ただ、攻撃といっても、それを正面きつて行う場合は、相手を怒らせ、恋愛関係そのものを破壊しかねない。だからこそ、それぞれ月や苦痛への質問の形を借りて、つまり自分が責任をとる必要がない状況を設定して、恋する詩人は冷淡な貴婦人に対して皮肉を言っているのである。が、その皮肉も、相手が自分への攻撃であると明らかに感知できる場合は、ハムレットの場合のように、争いと悲劇を生む危険がある。恋愛関係を維持しながら、しかも相手を攻撃する皮肉は、だから、絶えず自分を否定する用意をしていなければならない。したがって、この場合の最上の皮肉は、それが同時に自分に対する皮肉であるような、いわば道化的インテリジェントな皮肉であろう。アストロフェルの皮肉はそれに近い。が、『短詩選集』の詩人の皮肉は、まだそこまで円熟していない。彼は、段階をふみ、攻

三番目の転にあたる詩である。前の二つの詩では、表向きでは、一応、当の貴婦人の美と徳とが称讃され、それを汚す苦痛は非難され、退散するよう求められている。ところがこの詩では、苦痛への退散勧告がなくなるばかりでなく、むしろ苦痛を味方に引き入れての貴婦人攻撃が始まる。それも正面きつての攻撃でなく、苦痛を盾にしての皮肉であるところに、この詩の面白さがあるといえよう。

まず目につくのは貴婦人についての描写で、彼女は、「監禁もその眼を恐れ」、「他人の悲しみや嘆きを、貞淑に支えることが出来」などと、皮肉の調子で敬して遠ざけられ、最後には「しばしば全ての人の心を貪り食らう顔」をもつ冷酷な人間にされる。それに対し、苦痛の方は、より親しみをもつて、詩人の手元に引き寄せられる。「子供」、「兄弟」、「父親」などの肉親関係を表わす言葉がそれを示しているが、「なんじ苦痛よ、天から追放された、憎まれ者の苦痛よ」という呼びかけも、今まで以上の同情の響きを含んでいる。苦痛は、ここでは「悪党」や「盗賊」でなく「人間の弱さの預かり子」、「悲哀の兄弟」で、弱く哀れむべき存在とされている。

したがって、このソネットでは、苦痛は愛人を苦しめる故に非難されるべきである、というモラルは通用しない。また、苦痛が彼女を求めるのは彼女の称讃のお余りにあずかろうとすることである、という解釈も棄てられる。そして、そのように彼女への直接的執着を一時否定した立場から、改めて「どうして、お前は彼女を離さぬのか」と、その理由が問われる。それほどに弱くて憎まれものの苦痛が、どうして防御の堅固な冷酷な貴婦人にとりついているのか、という驚きである。それは、更に、

どんな不思議な勇気が、お前の卑劣な心を捉えたのか、  
しばしば全て人の心を貪り食らう顔を恐れぬとは。

という、その不思議な勇気に対する驚嘆に発展する。いや、あえて言えば、驚嘆するふりをしているのである。ここで詩人が本当に言いたいことは、次の質問の中に暗示されていると見るべきであろう。

それとも、天からの命令で、この役を演じているというのか。だから、その神々の嫉妬には、どうしようもないというのか。

なしている。

おお、苦痛よ、私は与えた称讃を取り消す。

そして誓って言う、彼女はお前を受けるに値しないと。

苦痛は、彼女に苦しみを与える故に、排斥さるべきであることは言うまでもない。しかし、苦痛が彼女を求めたのは、彼女が称えられるべき美質の持ち主であるからに他ならない。したがって、それを退散させるのには、単に凶々しい奴呼びわりして「彼女は更に愛する人の目を惹き、お前は更に憎しみを買おう」と脅すだけでは足りない。むしろ、この詩の結句のように、「彼女はお前（苦痛）をもつだけの値打がないのだ」と言い、彼女の称讃を「取り消す」のが合理的である。そこに、感傷に流されないシドニーの知性ウィットの働きを見ることができよう。

もちろん、彼女への讃辞を取り消すといっても、客観的存在としての彼女の美しさに変化するわけではない。ただ、それによって、詩人の側に、彼女への直接的執着を一時否定して、彼女を客観的、批判的に眺めうる余裕が生じたことは確かである。その余裕が次の

詩に見られるような攻撃への足場を与えていると考えられる。

なんじ苦痛よ、忌み嫌われる監禁への唯一の訪問客、呪いの子供、人間の弱さの預かり子、

悲哀の兄弟、苦情の父親よ。

なんじ苦痛よ、天国から追放された、憎まれ者の苦痛よ、

どうしてお前は彼女を離さぬのか。《監禁》もその眼を恐れ災いも祝福し、その弱さを美徳の甲冑で固め、

他人の悲しみや嘆きを、貞淑に支えることが出来、

その美しい天空には、高貴な思想の天使が群がっている彼女

なのに。

どんな不思議な勇気が、お前の卑劣な心を捉えたのか。

しばしば全ての人の心を貪り食らう顔を恐れぬとは。

それとも、天からの命令で、この役を演じているというのか。

だから、その神々の嫉妬には、どうしようもないというのか。

もしそうなら、ああ、あの部分が災いを受けている間は、

彼女の舌をとめてくれ、これ以上「いや」と言わないように。

(第一〇番)

これは、起承転結を踏む四つのソネット群において、

彼女の脚を（おお、脚を）、いつも美しい足取りの脚を。

苦痛は彼女への称賛を聞き、内なる炎で胸をふくらませ、  
（まず私の胸を彼の生け贄として封じ込め）

彼女のもとに飛んで行く。そして、欲望で大胆になり、  
その盗賊は、（当代称賛の的である）彼女の顔に口付けする。  
おお、苦痛よ、私は与えた称賛を取り消す。

そして、誓って言う、彼女はお前を受けるに値しないと。

（第九番）

このソネットは、婦人に苦痛を与えた自分の心痛を呼び戻す詩人の叫びで始まる。それは、前の詩の結びで「凶々しい苦痛め、いつまでも過ちを続けるでない」という苦痛に対する退散勧告の主題を受け継いだものである。もちろん、この場合の苦痛は、詩人自身の心の痛みであり、前の詩で天然痘の痛みに移入されていたのがここで表面化したと言えよう。そして、それに応じて、苦痛が彼女を求めた理由もより具体的になり、彼女の讚美と苦痛の弁護との矛盾的結びつきがより露わになる。したがって、苦痛が彼女のもとから退散するためには、彼女への讚辞を取り消さねばならない、という痛烈な皮肉がこのソネットのみそとなつている

わけである。

この詩では、「彼女を正当に称讚しながら、僕の苦境を訴えた」という言葉が示すように、苦痛の訴えは、彼女の称讚と離れがたく結びついている。おそらく、詩人は、心の痛みを覚えるときは彼女の美しさを思い出し、彼女の美しさを思うと、ますます心の痛みを覚えるのであろう。そして、彼女を称讚する言葉もより具体的になつている。「苦い返事も甘美にする彼女の息」、「子供のような愛を育てる、彼女の乳白色の胸」、「彼女の脚」など、清らかで非情でさえありながら、なお官能的欲望をそそのかに十分なほど具体的にである。苦痛はこれらの讚辞を聞き、欲望の炎で胸をふくらませて飛んでゆき、彼女に口づけをする。

ところで、このような詩人の心痛が婦人に苦痛を与えるに至ったいきさつの描写において、「称讚」、「称える」、「讚辞」などの言葉が繰り返されているのに注意すべきである。それは、苦痛が本来邪悪であるから彼女に危害を加えたというよりは、むしろ彼女が称讚さるべき美質の持ち主であるから、苦痛が彼女を求めたのだという理由を強調するためのシドニーの狡猾な皮肉である。そしてそれが次の結句を導き出す伏線を



途中で「悪賢い卑劣漢」にたとえられ、最後には

ああ、凶々しい苦痛め、いつまでも過ちを続けるでない、  
彼女は更に愛する人の目を惹き、お前は更に憎しみを買おう。

と、その過ちをとがめられ、貴婦人の顔から退散するよう勧告される。したがって、この詩では、苦痛は詩人の愛する貴婦人を苦しめ汚すものとして敵視され、他方、夫人の美と徳は一貫して称揚されていると考えられる。

しかし、それは詩の建前、あるいは表向きであって、冒頭の二行と結びの二行を除く三つの四行句の主要部分で述べられていることは、必ずしも苦痛に対する非難、あるいは敵意というものではない。そこに見られるのは、苦痛がなぜ彼女の顔に移り住むに至ったかの説明であるが、それによれば、苦痛は何らかの危害を加える目的で彼女を襲ったのではない。苦痛は、「至る所で罵られているのを恥じて」、その醜い悪を他人の善の中にかくす悪党のように、自然がその最高の贈り物を納める宝庫として造った彼女の顔の中に「隠れ住む」のである。苦痛にとって、彼女の顔は、いわ

ば世の非難の嵐を避ける避難所なのである。名誉を重んずる心も持つており、むしろ哀れむべき存在といえるかも知れない。それは、『アストロフェルとステラ』の有名な月に呼びかけるソネット(第三一番)と同じく、シドニー流の感傷的虚構(パセリ、ファンタジー)であり、詩人自身の苦痛の経験が、そこに感情移入されていると見てよい。

美・徳兼備の貴婦人の顔に「惨酷な汚れ」をもつ苦痛が宿つてよいはずはない。しかし、苦痛がそこに宿ることを求めたのは、それ相当の理由があったのである。詩人の側における、この苦痛を非難する表向きの姿勢と、その裏でひそやかに苦痛を弁護しようとする姿勢との矛盾は、いきおい、次の第九番のソネットで顕在化し、新しい展開を与えられる。

ああ、私に災いあれ、私に心痛を返してくれ。

私の燃える舌が、私の愛人に苦痛を与えたのだ。

私の苦しむ心は、苦しみの余り、苦しみに対して、

彼女を正当に称賛しながら、私の苦境を訴えたから。

私は称えた、決して運不運に動かされぬ彼女の眼を、

苦い返事も甘美にする彼女の息を

子供のような愛を育てる、彼女の乳白色の胸を。

き、エリザベス女王がたまたま当時流行の天然痘で倒れ、母はその看護のため宮中に留まることを余儀なくされ、父と同行することができなかった。母メアリを中心とする侍女たちの献身的な看護の甲斐あって、女王は恢復したが、シドニーの母がその不休の奉仕の報酬として得たのが、終生消えることのない「あばた」であったという。右の詩の冒頭にある「生への祟り、死のはなはだしき汚名、地獄の煙、(苦痛)」と呼ばれる怪物」という言葉の背後には、母親についてのそのような痛切な思い出があるかもしれない。

しかし、それ以外に、たとえばシドニーの愛する女性があるとき天然痘にかかったというような記録は、もちろん見当たらない。彼の愛する女性といえば、『アストロフェルとステラ』におけるステラ、すなわちペネロピ・デヴァール（初代エセックス伯の娘でリッチ卿と結婚した）があげられるが、そのペネロピがこのソネットの「わが愛する貴婦人」と同一人物であると考えられることには根拠がないし、またそう考える必要もないであろう。このソネットにおいても、詩人は愛にコミットしているわけではなく、彼の主要な関心事は、愛する女性が「顔に痛みをもつ」という、宮廷風恋愛

の伝統ではいささか型破りの状況設定によって、人の意表を衝いて働く彼の知性の芸を見せることにある、と思われるからである。

さて、このソネットに描かれている貴婦人は、「自然がその最高の贈り物を仕舞っておく宝庫として造った顔」を持ち、それはまた「美が輝き、徳が君臨する御座」とも言われているから、宮廷風恋愛の約束に則った美と徳を兼ね備えた貴婦人であることは明らかである。が、またその約束に従って、貴婦人は純潔と貞節を守るために、彼女の恋人である詩人に冷淡な態度をとり、彼を苦しめ嘆かせることが予想されるが、それは第九番のソネットの「決して運不運に動かされぬ眼」とか、第一〇番の「他人の悲しみや嘆きを、貞淑に支える」とかの皮肉まじりの言葉で示されている。

ところで、このような宮廷風恋愛における貴婦人がその顔に痛みをもったとすると、彼女を愛する詩人は、当然その苦痛に同情する詩を作るべきで、この第八番のソネットはまずその建前で作られていると思われる。苦痛は、冒頭で「生への祟り、死のはなはだしき汚名、地獄の煙、(苦痛)」と呼ばれる怪物」と誹謗され、

作品の中でそれを最もよく示す具体的事例の一つとして、〈苦痛〉に関する四篇のソネット群を「遊戯としての愛」という観点から、次に紹介してみたい。そしてその詩の検討は、自ずと『アストロフェルとステラ』の詩の特徴をより明らかにするのに役立つであろうと思われる。

それは、第八番から第一一番までの連結された四つのソネット群である。その冒頭には、「次の四篇のソネットは、私の愛する貴婦人が顔に痛みをもったときに作られたもの」という説明がついていて、四篇のソネットが「苦痛」という主題のもとに、いわば起承転結をふんで展開する構成になっている。その点、例えば、シェイクスピア作『ソネット集』の中で、連結されたソネット群（第三三番〜第三六番）に類似するもので、二人の詩人の思考パターンの違いを見るためにも有益な実例である。それは次のように始まる。

生への崇り、死のはなはだしき汚名、

地獄の煙、〈苦痛〉と呼ばれる怪物が、

長い間、彼の無作法な来訪に不満を持つ人々に、  
至る所でののしられているのを恥じて、

ちやうど、自分の醜い悪を、他人の善の中に隠すことと  
時と旅から学んだ悪賢い卑劣漢のように、

近ごろ、自然がその最高の贈り物をしまっておく

宝庫として造った、彼女の顔の中に隠れた。

怪物は、美が輝き、徳が君臨する聖なる御座の特権で、

彼女が大きな称賛をえているので、

自分も、僅かでも、幾分か称賛に与ることを期待する、

自分の惨酷な汚れを、彼女の輝きの中に包み込んで。

ああ、図々しい苦痛め、いつまでも過ちを続けるでない。

彼女は更に愛する人の目を惹き、お前は更に憎しみを買おう。

(第八番)

この詩の主題となっている愛する貴婦人の顔に宿った「痛み」については、歯痛ではないかという推測もあるが、一二行の「惨酷な汚れ」とか、第一〇番一行の「忌み嫌われる監禁」などの言葉からみて、それを天然痘と見るのが適当であるとされている (Ringer ed. *The Poems of Sir Philip Sidney*, p. 428)。ちなみに、シドニーの伝記の中で天然痘への言及があるのは、彼の母親レイディ・メアリに関連してである。父ヘンリーが一五六六年新総督としてアイルランドに赴いたと

（第一番九〜一四行）

と、愛の神への屈服が告げられる。しかし、それは無条件の屈服ではなく、愛の牢獄の看守である愛人が冷酷な仕打ちを加える場合は牢破りをして、隸属関係を絶つ、という条件つきであることに注意すべきである。このような条件は、いわゆる真実の永続的な愛を約束するものではない。

そして、それに続く詩篇は、愛人の美しさの讚美とともに、満たされぬ欲望を主題とするものがほとんどで、最後には、約束どおり、その不実な愛に対する反抗と別離が起ころ。

愛よ、私から離れ去れ、塵に帰するしかないお前は。

そなた、私の心よ、より高きものを希求し、

決して錆びつくことのないもので豊かになれ。

移ろうものはすべて、移ろい易い喜びしかもたらさない。

（第三一番一〜四行）

と、この地上のはかなさの認識にもとづいて、天上の光、永遠の愛を求める心が示されるのである。このよ

うな（取り消しの詩）は『アストロフェルとステラ』には見られない。アストロフェルも地上的な恋人であるが、その愛を取り消すことをしない。そこに彼の誠実さとともに、また墮落の危険性があると言えよう。

\* \* \*

『短詩選集』では、したがって、詩人はまだ愛に完全にはコミットしていないと考えてよい。そして、このことは、シドニーにとって創作活動そのものが一つの余技、政治や外交も舞台での欲求不満を紛らす慰戯の一面をもっていたことと無関係ではないであろう。その段階では、恋愛も非常に興味をそそる一つの遊戯であつたであろう。

ところで、そのような恋愛詩において、最も読者を楽しませる要素は何であろうか。一口で言えば、知性と皮肉である。一見したところ、愛と愛人の魅力に屈服しているように装いながら、実際は、たえず冷静を保ち、愛の不当な支配に反撥しつつ、結局はその危険な状態から離脱する。そのような術は、皮肉を武器とする活撥な知性の働きによる他はないであろう。この

や、「……の調べに乗せて」という言葉が示すように、イタリアやスペインのソングや詩を土台にしての様々なスタンザ形式や韻律を実験した作品であり、新しい英詩を開拓しようとする野心的な詩人としてのシドニーの関心のありかたを示して興味深いものである。これらの詩篇の背後には、当時シドニーを中心に、彼の叔父レスタター伯邸（Leicester House）に集まり、新しい韻律について活気あふれる議論を交わしたスペンサー、ドランド、ダイアー、グレヴィル、ハーヴェイ等の、いわゆる「アレオパガス」（Areopagus）と言われる詩人たちの姿があるはずである。

\* \* \*

『短詩選集』に収められている作品は、最初から一貫した意図をもって書かれたものではなく、様々な機会にさまざまな韻律上の実験を試みたものの集成という観を呈するが、その配列の点から見て、一つの大きな特徴があるように思われる。そのほとんどが恋愛詩であるこの詩集の最初には、愛への屈服を主題とする二つのソネットが置かれ、最後には、それと対応する

ように、愛との別離を歌う二つのソネットが配置されていて、全体が初めと終りをもった愛の経験の様々な変奏曲という体裁になっている。そのことから見て、ここで描かれている愛は、永遠的なものでなく、一時的なものといえる。もちろん、恋物語の作者が、最後になって、今まで描いてきた愛の価値を取り消すのは、宮廷風恋愛詩における（パリノウド）と呼ばれる一つの常套手段であるが、この作品の特徴は、その意図が冒頭の詩篇からすでにより明瞭に察知できる点である。すなわち、第一番のソネットでは、「裸の感覚が、武装した理性に打ち克つことができ、恐怖で凍えている心臓が、氷で暖まるのであるから」というようなペトラルカ流の〈矛盾語法〉<sup>オキシモロン</sup>によって、詩人を襲った愛の力が描かれたのち、

おお、愛神よ、ひどく嫌いなそなたの軛に、私は屈する。  
だがそれも武勇の掟を頼んでのこと。その掟は教えている、  
手荒な仕打ちを受け、それで牢を破った者は、  
正当に放免されたのであり、名誉に違反するものではないと。  
だが、私の看守が好ましい看守なら、  
私はそなたを主君とし、誓ってそなた奴隸となろう。

恋愛両方に終止符を打ち。

——Neil L. Rudenstine, *Sidney's Poetic Development*, Harvard Univ. Press, 1967, pp. 115-6.

本来は個々独立して作られたそれぞれの詩が、このように作者の手によって入念に配列され全体として「語り手がいやいやながら愛を受け入れてから、欲求不満と苦しみ、優柔不断、自制と自己犠牲などの諸段階を経て、最後の反抗に達する曲折」(Rudenstine, p.117)を暗示するものとなっている。そしてそこに『アストロフェルとステラ』となつて結実するシドニーのソネット連作の下絵ともいふべきものを見る思いがしないであろうか。もちろん、『アストロフェルとステラ』の結論として、一九世紀の編者グロウザート (See Alexander. B. Grosart ed. *The Complete Poems of Sir Philip Sidney*. 3 vols. London, 1877) がしたように、『短詩選集』の最後の二つのソネットを持つてくるということとはふさわしくないであろうけれども。

ルーデンスタインは、右の摘要に続いて、この詩集の中の恋人の素直であるとともに機知に富んだ如才のない策略家的性格、欲求不満の只中でも自分の状態の

ユーモアを解しうる能力、作品全体を通じて見られる都会風の優雅さと洗練されたエロチシズム、自己劇化への傾向、「技巧的で自意識が強いが、なお流動性をもつて自然であり、才気縦横で、計算ずくで策略的であるが、それでも力強い感情に満ちている」(Rudenstine, p.122)文体、等々を指摘している。これらは『アーケイディア』のエクログ(牧歌詩)に見られる常套的形式性への傾向と著しい対照をなす諸特徴であるが、それはよりシドニーの個人的な好み結びついており、やがて『アストロフェルとステラ』において更に生彩をおびて顕著となるものである。

もちろん『アストロフェルとステラ』との関係から見たこのような意義を別にしても、『短詩選集』の中の詩は、それぞれが実に楽しい読物を提供しているといえる。この解説の最初にふれた第四番、第二〇番、第三一番、第三二番等の有名な作品の他に、友人ダイアーに対するユーモアあふれる返しの歌である第一六番や、イングランドの七不思議を比喩にして、自分の恋の不思議な種々相を描いてみせる才気縦横の第二二番、等々。また、これらの詩の多くは、ラテン詩からの翻訳(ラテン韻律をそのまま移そうとしている)

第八の一―一番 これらは「愛する貴婦人が顔に痛みをもったときに作られた」、関連したソネット群である。それらは、痛み（病氣）が貴婦人を襲ったことを非難することで始まるが、結局は、詩人は愛する貴婦人の苦しみに同情するの  
に、彼女の方は彼の苦しみに無関心であるという、苦々しい皮肉の調子で終る。

第二二―一四番 これらはラテン詩からの翻訳で、その二つはラテン韻律（短長律）である。恋人の苦しみを「一般化」し、事物の無常性、および婦人の心の変わり易さと冷酷さを述べる。

第二五―二二番 これらはソネットおよび関連のある抒情詩（ソングではない）的スタンザで書かれた詩群である。最初の詩は、恋人を自由でもなく縛られてもない鳩に喩える。そしてこの比喩が、それに続く詩の雰囲気を決めている。欲望は衰えてもいず、また満たされてもいない。そしてその結果はどっちつかずの不安定な状態である。第一八番と第一九番は瞑想している恋人を示している。第二〇番は「いとまごい」であるが、第二一番は恋人の復帰を知らせる。第

二二番は「最も純粋な愛」は感覚的欲望の死から生まれねばならないことを暗示する。

第二三―三〇番 これらはソングである『アストロフェルとステラ』の第四二番と第四八番と同じく、恋人の窮地のペトラルカ的解決を試みる。すなわち、欲望が（第二二番の提案にしたがつて）抑制され、婦人の美德へ捧げる貢物である犠牲的「死」を受け入れることに真の生命を見い出す（第二三―二六番）。しかし、その安定は不確かなもので、第二七番は一つの反抗を示している。しかし婦人が泣いて、その詩の最後では、恋人は従順になる。第二八―第二九番はモンテマヨールからの翻訳で、第二八番は棄てられて、失われた幸せを追想している恋人を示す。第三〇番は歓乎の声をあげて「愛は死んだ」と布告するが、それは再び恋人の前言取り消しをもって終わる。

第三一―三三番 これらはソネットで、明らかに第一―二番を補足するよう意図されている。欲望を全く放棄する恋人を示し、「愛よ、私から離れ去れ」という言葉によって、この詩集および

である。本来のソネットは一三篇で、またラテン語およびスペイン語からの翻訳詩五篇も含んでいる。

そのような事情からか、今まで、まとまりのある作品として注目され、また考察されたことはほとんどない。しかし、個々の作品としては、たとえば第四番の「お前の刺は外側にあるが、僕の刺は心臓に刺さっている」という折り返しをもつナイチンゲールについてのソング、第三〇番の「鐘を鳴り響かせ、弔いの喪服を用意させよ」で始まる愛の葬送歌ともいうべきソング、そして最後の「お前、盲人の目標、お前、愚か者が自ら選んだ罠」、および「愛よ、私から離れ去れ、塵に帰するしかないお前は」で始まる愛への別離を歌う第三一番と第三二番の二つのソネットなどは、しばしば、シドニーの詩の中の逸品として、ルネサンス英詩のアンソロジーで親しまれている。

しかし、雑集とはいいながら、その配列の点からみて、作者シドニーが一つの構成らしきものを与えようとしたことは明らかである。すなわち、そのほとんどが恋愛詩であるこの詩集の最初に愛への屈服を主題とする二つのソネットを置き、そして最後に、それと対応するように、愛との別離を歌う二つのソネットを配

置し、全体を愛の経験の様々な変奏曲という体裁にしている。その点、大まかにいって、この『短詩選集』は『アストロフェルとステラ』に類似した趣向をもっていることと見なすことができる。いまその概要を示すために、この作品を一つのまとまりをもつものとして取り上げて考察した数少ない批評家の一人ルーデンスターインによる摘要を訳出しておきたい。

第一〜二番 これらはソネットである。恋人はい

いやいやながら愛に屈服する——もつとも、もし自分が「ひどい仕打ちを受ける」なら、反抗の正当性を主張するぞと宣言するのではあるが。実際、その反抗は第二七〜三二番で起こる。

第三〜七番 これらはソングで、恋人の欲望と

愛する婦人の冷淡さの主題を展開する。第三〜四番は同じスタンザ形式からなり、婦人が「貞淑でしかも残酷である」ことを残念がる。第五番では、婦人が不在であり、第六番では、恋人は欲望にしんぼうするよう命じる。第七番の詩は、恋する者の欲求不満と愛する貴婦人に対する称讃とをなんとか調整している。



と接触する活動を行なったため、それを察知して危険を感じた女王によって本国に呼び戻されて、以後数年にわたって、政治・外交上の重要な役目を与えられなくなるという結果を生むのである。

政治・外交上の重要な役目を与えられなくなった理由には、右のことに他に、帰国後まもなく父のアイランド政策を弁護する論文を書いて女王に提出したと、更に、一五七九年に、エリザベス女王とフランスのアンジュー公との結婚問題をめぐっての意見の対立からオックスフォード伯との間に争いを生じたり、その結婚に反対する論文を女王に送り、彼女の逆鱗に触れ、一時宮廷から退かざるをえなくなったこと、などを付け加えることができよう。

しかし、その数年間——一五八〇年前後は、彼自身にとつては本来の男性的活動の舞台から疎外された不本意な時期であったとしても、英文学の世界にとつては、『詩の擁護』や『アストロフェルとステラ』や『アーケイディア』などの偉大な作品が次々と生み出された幸せな時であったと言える。しかし、その数年後の一五八五年、シドニーが三一歳のとき、スペインの脅威が増大したため、皮肉にも女王は彼をフリシンゲン

の司令官に任じ、ネーデルランドの戦場に赴かせたのであった。

\* \* \*

さて、ここで日本語訳と注釈を加えた『短詩選集』*Certain Sonnets* は、一三篇のソネットと一九篇のソング(ラテン語およびスペイン語からの翻訳詩五篇を含む)を収めた詩集で、一五九八年版の『アーケイディア』*Arcadia*の中に収録されて出版された。執筆年代は『アストロフェルとステラ』のそれ(一五八一―二年)に先行する一五七七―八一年頃と推定されており、言わば『アストロフェルとステラ』の製作を準備する習作的意義をもつ詩集といえる。その意味で、この詩集で描かれている愛の経験、あるいは愛に対する詩人の態度を瞥見しておくことは、次に書かれた本格的な愛の詩集である『アストロフェルとステラ』の世界を理解するのに役立つであろう。

この詩集に収められた作品は、最初から一貫した意図をもって書かれたものではなく、様々の機会に、様々の韻律上の実験を試みたものの雑集ともいふべきもの

とっては、彼は「一門の光明」、偉大な政治家になるべき人であった。学者や文人たちにとっては、彼は雅量あるパトロンであり、また当代最高の詩人の一人であった。まさに彼は、エリザベス一世（在位一五五八―一六〇三）の宮廷において、「廷臣の眼差し、学者の弁舌、武士の剣、御国の華とも、末々の力とも、風流の鑑とも、作法の型とも、心ある人がみな仰ぎ見た」紳士の典型であったといえる。

しかし、このことは、シドニーが宮廷において女王の寵愛を一身に受けていた、ということを必ずしも意味しない。父親ヘンリー・シドニーは、メアリ女王（在位一五五三―一五八）の時代にはその夫スペインのフィリップ二世の侍従武官を勤め、エリザベス女王の時代になってからは二度にわたってアイルランド総督に任ぜられるほどの重臣であった。また、母親メアリはノーサンバランド公ダドリーの娘で、女王の寵臣レスタター伯ロバート・ダドリーの姉であった。したがって、シドニーは父母両方の側において高い血統を誇りうる身分として育てられ、期待をかけられた。しかし、母メアリの父ダドリー公は、シドニーが生まれる一年前の一五五三年に、ヘンリー七世の曾孫ジェイン・グレイ

を女王に擁立しようと企て、叛逆の罪で処刑されるといふ事件があり、シドニー家にも暗い影を投げていたし、また、後にアイルランド総督となった父が現地でとった剛直な政策（軍事課税など）が、優柔不断な女王のそれと折り合わず、女王から相応の処遇を受けなかった、ということなどは記憶しておくべきであろう。

しかし、シドニー自身は、一門の期待を担い、シュルーズベリー文法学校、オックスフォード大学クライスト・チャーチ学寮などで学んだのち、一五七二年から三年間いわゆるグラント・ツアーに出て、ヨーロッパ諸国、そしてイタリアの主要都市に遊び、諸外国語の習得と諸国の事情の理解に秀れた才能を発揮し、その所期の目的を果して帰国する。そして、帰国後一年を経た一五七六年には、女王の宮廷での「酌取り」の役に任ぜられ、翌一五七七年には二二歳の若さで、ドイツ新皇帝ルドルフ二世および新選帝侯パラティン伯ルイス六世のもとに、彼らそれぞれの父親の逝去に対して哀悼を捧げる外交使節として派遣されている。だが、その大陸滞在中に、使節の役目をこえた出過ぎた活動、スペインの脅威に対抗するプロテスタント同盟結成の可能性を探るためオーストリアやドイツの貴族

## 『短詞選集』解説

フィリップ・シドニー (Sir Philip Sidney, 1554-1586)

は、その天性の品格と普遍的教養、そして宮廷人、外交官、軍人、詩人、また学者や文人のパトロンとしての多面的な活動によって、英国ルネサンスにおける理想的紳士の典型と謳われた人物である。一五八六年、ネーデルランドのズットフェンでのスペイン軍との戦いで致命傷を受け、三二歳にひと月足りない短い生涯を終えたのであるが、その活動を文学の領域に限っても、ケニス・ミユアの次の言葉が示すように、残した業績は偉大であった。

シドニーは、人間としてはばかりでなく、作家としても偉大であった。それは一つには、彼の著作の中に彼の人柄の秀れた美しさが映っているからであり、また一つには、文学の三つの異なった分野で成した彼の功績によってである。その『詩の擁護』は英国における最初の本格的な批評の書である。その『アストロフェルとステラ』は、『妖精の女王』よりも模倣しやすいものであるゆえに、より影響力の大き

い、一六世紀の有力な作品の一つである。そして『アーケイディア』はエリザベス朝の散文の偉大な傑作であるが、もしそれが一般の読者にもっと近づきやすいものであれば、もっと広く、しかるものとして認められるであろう。シドニーは、これだけのことを全て、一〇年の間に、それも政治、外交、馬上試合、旅行、翻訳、恋、戦争などに明け暮れた生活の合間に、成し遂げたのであった。

— Kenneth Muir, *Sir Philip Sidney*, Longman, 1960, p.

35.

この解説には、シドニーが先駆者となった牧歌劇「五月祭の佳人」も含めるべきだが、それはともあれ、彼がズットフェンの戦場で重傷を負って倒れたとき、自分に運ばれてきた水を、同じように傷ついて倒れていた傍らの兵士を見やり、「君の方が私より必要としている」と言って譲ってやったという逸話は、私たち日本人にも、早くから英語読本などを通して、知られているところである。シドニーの死の訃報が英国に達したとき、人々は異常な悲しみに襲われ、深い哀惜の念に満たされたという。シドニーの友人や親族たちに

では、この世よ、さらばだ、私にはお前の限界が見えた。  
永遠の愛よ、そなたは、私の中で生きつづけてもらいたい。

*Splendidis longum vale dico nungis*

（華やかな瑣末事に永遠の別れを告げる）

一五行 華やかな瑣末事に永遠の別れを告げる 原文では *Splendidis longum vale dico nungis*. (I bid a long farewell to splendid nungis)、出典は不明。このように愛を瑣末事とみて、それに永遠の別れを告げるのは、シドニーにとって一時的な気分過ぎなかつたと思われる。

徳が、もっと立派な教訓を教えてください、  
欲望をいかにして殺すか、ということの他は何も望まず、  
私自身の中に、私の唯一の報酬を求めよと。

### 第三二番

愛よ、私から離れ去れ、塵に帰するしかないお前は。  
そなた、私の心よ、より高きものを希求し、  
決して錆びつくことのないもので豊かになれ。  
移ろうものはすべて、移ろい易い喜びしかもたらさない。

そなたの光を引っ込め、そなたの力をへりくだらせ、  
あの、永遠の自由を与えてくれる、快い軌につけるのだ。  
それは、雲を引き裂いて、光を放ち、  
光は照り輝き、我々に見るべき景色を与える。

おお、その光を、しっかり掴んで放さず、  
誕生から死へと延びているこの細い行路の案内とせよ。  
天の息から生まれ、天を求める者にとつて、  
道を踏み外すことが、いかに似つかわしくないかを思うのだ。

五

一〇

第三二番  
本詩に書かれていることは、シドニーにとって一時的な気分過ぎない。彼は『オールド・アーケイディア』の執筆を継続し、その後しばらくして、『アストロフェルとステラ』を書くことになる。

六行 快い軌 移ろい易い地上の愛に対して  
永遠の生命を与える神の愛。「わたしのくびきは負い易く、わたしの荷は軽い」(「マタイ伝」一一・三〇)を参照。

愛をこのように抑制できる

この分別を狂乱と呼ぶ気まぐれから、

よき主よ、我らを救いたまえ。

四〇

### 第三一番

お前、盲人の目標、お前、愚か者が自ら選んだ畏、  
浅はかな空想の泡、消散した想いの糟。

全ての罪悪の産着、謂れない心配の揺りかご。

お前、最後まで決して織られることのない意志の織物。

欲望よ、欲望を私は余りにも高く買はずぎた、

お前の価値のない品物を、切り刻まれた心という代価を払って。

お前は、余りにも、本当に余りにも長く、私を眠らせた。

もっと高貴な事柄に、私の心を準備せねばならぬのに。

だが、お前は私の滅亡を求めたが、無駄であった。

私に空虚なものを懂れさせたが、無駄であった。

お前のくすぶった炎をかき立てたが、無駄であった。

一〇

五

第三一番  
『短詩選集』の最後に置かれた三一番と  
三二番は、共に「愛」への別離を歌い、最  
初の「愛」への屈服を歌った一番と二番と  
に対応するように配置されている。いわゆ  
るパリオウド（取り消しの詩）である。

四行 最後まで決して……意志の織物  
デユッセウスの妻ペネロピは、二〇年に及  
ぶ夫の留守中に、一〇八人の求婚者にしつ  
こく言い寄られ難渋して、今仕上げている  
織物が完成した暁には、求婚者のどなたか  
を選んでその求愛を受け入れる覚悟だと宣  
言するが、それは一時の言い逃れで、ペネ  
ロピは昼間織った織物を夜の間に全部解い  
て、また一から始めているのを求婚者に見  
破られ、窮地に陥ることになる。（ここでは、  
その織物への言及。

男をこんなに扱う女から、  
神よ、我らを救いたまえ。

二〇

葬送歌を歌え、慰霊ミサを行え、  
愛が死んだのだから。

不法の殿が彼の墓の建造を命じる。

その材料は、私の恋人の大理石の胸、

そこに刻まれる墓碑銘は、

二五

「彼女の眼は、かつて彼の投げ矢なり」。

こんな恩知らずの移り気から、

こんな女の狂乱から、

男をこんなに扱う女から、

神よ、我らを救いたまえ。

三〇

ああ、私は嘘つきだ。怒りがこの誤りを生んだのだ。

愛は死んでいない。

愛は、死んだのではなく、眠っているのだ、

比類ない彼女の心の中で。

そこで、彼女は彼の助言を守っている。

彼女にふさしい価値を見つけるまで。

だから、こんな恥ずべきさまぐれから、

三五

二一行 慰霊 (trials) ミサ ローマ・カトリックで、煉獄での苦しみを和らげる目的で、死者を弔う三〇日間連続慰霊ミサのこと。しかし、シドニー時代の英国国教会では、もはや礼拝式として受け入れられなかった。

二六行 彼女の眼は、かつて彼の投げ矢なり 愛神キューピッドは美女の眼の中に隠れ、そこから矢を射る。『アストロフェルとステラ』二〇番参照。

第三〇番

鐘を鳴り響かせ、弔いの喪服を用意させよ。

愛が身罷った、

愛は死に果てた、

深い侮蔑という疫病に冒されて。

価値ある者が、価値なき者として、拒まれ、

誠実な者が、美人の嘲笑を買うのだ。

こんな恩知らずの移り気から、

こんな女の狂乱から、

男をこんなに扱う女たちから、

神よ、我らを救いたまえ。

嘆き悲しめ、隣人たちよ、君たちは聞こえないか、

愛が死んだと言っているのが。

彼の死の床は、孔雀の空威張り、

彼の経帷子は、恥辱、

彼の遺書は、清らかさを偽った見せかけ、

彼の唯一の遺言執行者は、非難。

こんな恩知らずの移り気から、

こんな女の狂乱から、

第三〇番

シドニーの詩の中で最もよく知られているものの一つ。「愛」が死んだことを知らせ、それを弔う葬送歌の体裁をとっている。第一連、二連、三連の最後の四行は、同じ言葉で、恩知らずの女の不実を語っているが、しかし、最後にはその布告を取り消し、愛人を讃える言葉で終わる。「主よ、われらを救いたまえ」というリフレインは、英国国教会の祈祷書に見られる応誦文。

五

一〇

一五



至福と結びついた、この高尚な優美さについて、

私は、これ以上債務を負っていない。

あなたと同じ材料で造られたもので、

愛する人よ、あなたは十分な支払いを受けているから。

私の前には、自然の宝、

顔と眼において類い稀な存在が居るので、

私の場所が、私に大きな喜びを与えているとしても、

あなたも、私の手の中に、同じものをもっており、

私がああなたの顔の中で評価するものを見ているから。

考えてはいけない、その対応物は等質にできていないと。

あなたの中の光輝は、あなたのもとに留まり、

鏡は、あなたにその影を与えているだけで、

私には、私の眼が真実の姿を届けているのだと。

非常に尊ばれてきたこの考えは、

いつも愛の絆を軽蔑してきた者のほうが、

恋に囚われている者よりも、よりよく理解できる。

前者は、生き生きした姿を受け入れるが、

後者は、その偽り装われた姿を見るだけ。

五

一〇

一五

一四行 非常に尊ばれてきたこの考え「実体」と「影」との考え。実体すなわち美のイデアは、理性に導かれる者のみが見ることができ、感覚的で愛欲にとらわれる者には、その影しか見えないとする新プラトン主義的思想のこと。

一五行 いつも愛の絆を軽蔑してきた者ディアナのこと。

これほど変わらぬ愛をもつ者が、

これほど悲しむのを、誰か見たことがあるか。

ああ、髪よ、お前は悲しくないか、

お前が、元の場所から離れてきて、

かつての私の生き様を見たその眼で、

今の私の有様を見て。

三〇

三九行 砂の上に書いた 例えば、スペイン  
サー『アモレットイ』七五番で書かれてい  
るように、伝統的に「脆く儂い切望」のイ  
メージであり、それを基に覚悟を固めると  
いうことは、所詮、夢のごとく儂い結末と  
なるのは目に見えている。

最近、砂浜の上に、

この女が座っているのを、私は見た。

彼女は、指で、そこに書いた、

「死んだ方がましです、心変わりするくらいなら」と。

かくして、私の信念は固まった、

——見よ、力強い愛の手を——

一人の女が言い、砂の上に書いた

その言葉をもとにして。

三五

四〇

## 第二九番

同じモンテマヨールのシレノが、かの恋人の前で鏡を掲げ、  
鏡に映る自分の姿を見ている彼女を眺め、次のように言う。

## 第二九番

同じく『デイアナ』第一卷第三歌の忠実な  
英語訳。

ああ、髪よ、何日も、何日も、

私のダイアンは見せて、と私に言ったのだ、

子供じみたまま事遊びにかこつけて、

私がお前を身につけているかどうかを。

ああ、なんと度々、涙を浮かべ、

——おお、偽りの胸の涙よ——

彼女は疑惑の不安で一杯のように見えたことが、

私は、それを、ただからかってすましていたが、

教えておくれ、おお、金色の髪よ、

私が間違っていたかどうかを。

私は、あの人殺しの眼を信じようとした。

その眼が、私に信じてよいと保障したから。

お前は見たことはないか、彼女の怒りを、

彼女の言葉が仕向けたとおりに、

私の真心は変わらぬと私が誓うまで、

彼女がどんなに涙を流しつづけたかを。

こんなに心変わりする人が、

こんなに美しいのを、誰か見たことがあるか。

私の言葉が己の過ちを自認していることを、知っておくれ。

ファララレリダンダンダンダンデリダン、

ダンダンダンデリダンデリダンデイ。

私の生命にかけて、誓います、

私の愛し方が浅ければ、私の生き方も浅いのだと。

四〇

## 第二八番

モンテマヨールの手になるスペイン語の『ディアナ』から訳出されたもの。

その中で、牧童シレノは、今は彼を見捨てた愛人ディアナの、緑色の絹に包んだ少しばかりの髪の毛を取り出し、その髪の毛の毛に向かい、次のように嘆きをもらす。

おお、髪よ、この前見て以来

お前は、何という変わりようか。

この緑色は、お前にふさしくない。

その色は、希望にこそふさしい。

本当に、私は希望をもっていた、

希望に不安が混じっていたが――

ひよっとして、誰か他の羊飼いが、

この髪に近づく機会を持つのでは、という不安が。

五

## 第二八番

モンテマヨール (George De Montemayor; 1520-61) はポルトガル生まれのスペインの詩人・作家。彼の韻文を織り混ぜた散文で書かれ、田園生活を理想化した牧歌ロマンス『ディアナ』(Diana 1559) は好評を博し、ヨーロッパの各国語に訳された。シドニー『アーケイディア』にも大きな影響を与えたとされる。この詩は、シドニーによる『ディアナ』第一巻第一歌のかなり忠実な英語訳である。

この詩は、自分を捨てた愛人の髪を取り出し、過去のものとなった幸せを回想する恋人を描いている。

四行 この緑色 本詩では、色彩の象徴主義とでもいうものを二律背反的矛盾として用いる。元来、緑色は「希望」を象徴するが、ここでは、結局、「気紛れ、不実、心変わり」の意味。

もはや、あなたの優美さを、誇りとせぬがよい、  
繋ぎ止めるあなたの髪を、遺憾とするがよい。

あなたの言葉は、あなた自身を嘆くのに使うがよい。

もはや、あなたの輝きは、あなたの役に立たぬのだから。

フアララ レリダン ダン ダン ダン デリダン、

ダン ダン ダン デリダン デリダン デイ。

人目を惹こうと、絵の具を塗りたてぬがよい、

描いた絵が、真実の絵でないならば。

二〇

ああ、悲しいかな、彼女が泣いている。

私は馬鹿だった、何と愚かなことを思いつき、

激昂して、冒涇するなんて、

私の魂を預けている場所を。

フアララ レリダン ダン ダン ダン デリダン、

ダン ダン ダン デリダン デリダン デイ。

惨めな私は、認めねばならない、

私が非難するその罪は、彼女の貞節であることを。

三〇

優美さよ、私の愚行を優しく許しておくれ。

髪よ、私を、お前の虜として、しっかりと縛っておくれ。

言葉よ、おお、天上の知識をもった言葉よ、

三五

第二七番

ナボリのヴィラネルの調べに乗せて

あなたの優美さが、私の感覚をとらえ、

あなたの美しい髪が、私の心を鎖でつなぎ、

あなたの言葉が、私の貧弱な理性を動かした。

それで、私は天のようにあなたを愛した。

ファ ラ ラ レリダン ダン ダン デリダン、

ダン ダン ダン デリダン デリダン デイ。

それも、私の心にとって、あなたの外側が

内側の善を伝える使者であった間のこと。

五

今は、あなたの優美さも、不快なものに思われ、

あなたの髪は、髪一筋の値打もなくなり。

理性はあなたの言葉を捨て去った、

単なる言葉に過ぎないと分かったから。

ファ ラ ラ レリダン ダン ダン デリダン、

ダン ダン ダン デリダン デリダン デイ。

どんなに美しい標識でも、中身が駄目なら、

信頼を勝ち取ることはできぬ。

一五

第二七番

ヴィラネル (villanelle) は、一六世紀イタリアのナポリ民謡に由来するフランスの詩型で、田舎風の無伴奏の合唱曲。通例、五つの三行連句、最後に四行連句が続く一五行、全部が二つの脚韻に基づいて作詩される詩型だが、ここでは、各連八行の五連全体で二〇行、各連ごとに、二つの脚韻が利用されている。英詩では、おそらく、これが初めての試みである。

「優美」「髪」「言葉」のいわば三幅対を基点に構成された本詩において、「愛する人の外側が内側の善を伝えていた間は」、彼女に従順だった詩人がその間違いに気づいて反抗的となり、愛人の不誠実をなじるが、四連で愛人が涙を流すのを見て、反抗をやめ再び柔順となる次第が描かれる。

一〇

死ぬべき定めへと

足かせをはめられ、死の力が

襲いくる時を待っているのだから、

何も悲しむ理由はない、

全ての人が留まるこの道を、

栄光で終えることができる者に。ダメ、ダメ、ダメ、ダメ。

二〇

ダメ、ダメ、ダメ、ダメ、私は私の敵を憎めない。

惨酷な火を、

私の欲情の上に投げかけ、

降伏した私の心を略奪する彼女だが。

美によって殺された者は、

美しい死を感じ、

美しい死が生じる者には、

栄光が育つことを、誰も疑わない。

だから、彼女の輝きの中で死に、

栄光を味わっている私は、

苦痛の中にあっても、不平を言えない。ダメ、ダメ、ダメ、ダメ、ダメ。

三〇

二五

第二六番

「ダメ、ダメ、ダメ、ダメ、ダメ」で始まる  
ナポリの歌の調べに乗せて

ダメ、ダメ、ダメ、ダメ、ダメ、私は私の敵を憎めない。

惨酷な火を、

私の欲情の上に投げかけ、

降伏した私の心を略奪する彼女だが。

こよなく美しい炎が

全ての場所を包み、

そこに、熱の中でも極めつけの熱が生じ、

死にかけている私の心に、

何ほどかの喜びをもたらしてくれる。

心の宝が、

こよなく美しい光で燃えるから。ダメ、ダメ、ダメ、ダメ、ダメ。

ダメ、ダメ、ダメ、ダメ、ダメ、私は私の敵を憎めない。

惨酷な火を、

私の欲情の上に投げかけ、

降伏した私の心を略奪する彼女だが。

我々の生命は不滅ではなく、

第二六番

三連から成る本詩では、各連の最初と最後の行に、「ダメ、ダメ、ダメ、ダメ、ダメ」と四回の否定語と、それを含む各連最初の四行が繰り返されて、詩のリズムとテーマを作っている。



私の感覚は、私から離れ、  
 感覚を欠いた私は死んでも、  
 我々両方とも、あなたの中に生きているから。

あなたによって、私は生まれ変わり、  
 ああ、私の太陽であるあなたが向かうままに、  
 いつも向きを変える花と化した。

二五

二六行 この花は、太陽の向かってその向きを変える「ヘリオトロープ（キダチルリソウ）」のこと。

かくして、私は倒れても、このように立ち上がり、  
 かくして、私は死んでも、このように生き返り、  
 変化に応じて変化し、変化することはない。

かくして、私はあなたから離れることはできず、  
 かくして、私の諸感覚はあなたの上であり、  
 かくして、私が考えることはあなたのことであり、  
 かくして、私が求める者はあなたの中にあり、  
 私のすべて、それはあなたである。

三〇

美徳と結託した神々しい

美の暴力によって、

理性は、赤面して、引き下がり、

私の諸感覚は、喜んで屈服した。

五

私の諸感覚は、喜んで屈服し、

私の心の砦を引き渡したので、

私は生命を失ったぬけ殻となった。

一〇

諸感覚は、輝く太陽のもとへ赴き、

そこで、全ての死の中の死によって、

どんな危害へ急いだかを知る。

愚かな森の精サテユロスが、

初めて火に出会ったとき、

こよなく気に入ったその光で火傷したように。

一五

一五～一七行 サテユロスは初めて火を見たとき、愚かにも、火に口づけしたと言われる。

だが、それでも、愛する人よ、あなたは

諸感覚の死に対し、一つの生命を残してくれた、

全ての愛の生命であるあなたは。

二〇

私の二重の運命について、好きなようにするがよい。

私としては、ああ、心は十分に決まっている、

そうだ、私を縛る絆を解くことはしまいと。

償いが来るのが遅かるうとも、誓約を破らず、

運が傾いても、誠実を裏切らず、

変化が私の境遇を変えても、変化の中で変化すまいと。

常に変わらぬ私自身は、鷲の眼を持った真心をもつて、

太陽に向って飛んで行く、太陽が私の翼を焦がそうとも。

その炎が私の欲望を燃え上がらせても、

私は、不死鳥の火の中で死ぬのだから。

二〇

二五

### 第二五番

アリストファネス風の格調で

私に死をもたらす喜びを与えつつ、

私に命を授ける苦悩を与えつつ、

愛する人よ、ああ、私の眼が

あなたの光輝に釘付けになったとき、

### 第二五番

アリストファネス風の格調とは、i i c c i c i i という格調で、ホラティウスがその『歌謡 *Carminal*』の中で、二行連句で用いた。シオドア・スペンサーは、この詩を取り上げて論評し、シドニーの韻律法の成例としている。(Theodore Spencer, 'The Poetry of Sir Philip Sidney', *ELH* xii (1945), 260)

第二四番

「憂鬱の煙」の調べに乗せて

愛する人の心変わりに苦しんだことがあり、  
愛を失う者が経験するあの心痛を知っている人は、

私を見なくても、私の顔が描けよう。

そして、悲しみの木に生える忌まわしい蕾、

私の諸々の想いがどんな状態であるか書くことができよう。

しかし、風聞だけで語り、心を溶かすその心痛が、

どんな種類の業火であるか、充分わかっていない人は、

何が不機嫌のもとかを推測するが、誤診し、

脈をとつても、私の病気の正体を測りかねる。

おお、そうだ、そうなのだ、体験だけが教えてくれる、  
捨てられた悲しみの苦汁の味を。

そこでは、現在の不幸が、かつての至福を台無しにする、

いや、かつての至福が現在の苦しみをいや増す、

記憶の中に、両者が一緒に住まっている間は。

学ぶ者たちよ、私のもとに来るがよい。不幸の見本の私、  
幸運の女神の膝から滑り落ち、絶望の淵に沈む私のもとへ。

そして、私の轍を踏むか、踏まないでおくか、

第二四番

「憂鬱の煙」[The Smokes of Melancholy]

の歌曲は見つかっていない。

二四行 鶯の眼 中世の動物寓話集では、鶯  
は太陽を直視しうる唯一の鳥とされており、  
加えて、太陽の炎がその視力と翼を甦  
らせると考えられていた。

二五～二七行 太陽が愛する女性とすれ  
ば、太陽の炎はその女性の眼であり、その  
眼が彼の欲望を燃え上がらせるが、五〇〇  
年に一度自らの燃殻の灰の中から蘇るとさ  
れる不死鳥のように、彼の愛は常に蘇り続  
けると歌う。

その心は、その中に天を宿す。

だが、眼は美質の美を見ないし、

感覚は、心の気品を感じしない。

それでも、眼は奪われていない

彼女の美しい眼を見る視力を。

それは、内なる栄光を表わす

外なるしるし。

その幸せの中で死なぬ者は、

常に悲しみの中で生きるがよい。

だが、楽しい景色という果実で

自分の思いを満たした人は、

ここで、その眼を上へ上げ、

自然が造った最も美しい光を見よ。

それは分かれていくけれど、

眼と眼とを結びつける光、

自らは決して死ぬことはないが、

見る者が死ぬ原因となる光。

五

彼女は決して死ぬことはなく、

恋人の心の生命の中で生き続ける。

恋にその最も大切な部分を

消耗する者は、死ぬのが常である。

一〇

かくして、彼女の生命は常に守られている、

決して死ぬことのない愛の信実によって。

かくして、彼の死は報いられる、

彼の死によって彼女が生きているから。

一五

だから、見て、死ぬがよい。その喜びは

苦しみに充分報いてくれる。

永遠の財宝を得られる者には、

この世の宝を失っても、わずかな損失。

彼女の美質は不滅、

彼女の心は不滅。

その美質は、天の宮居にふさわしく、

二〇

「ナッソーのウイルヘルム」の曲調は、元々フランスのコンデ家の祖で、新教徒としてギーズ公と対立し、ユグノー戦争で新教徒を率いて戦い、捕えられて射殺されたルイ・ド・コンデ王子を蔑んで作られたフランスのカトリック教徒のそれであったが、曲調はそのままにオランダ語に置き換えられ、オランダのオレンジ王家の歌として取り入れられて、現在のオランダの国歌となるに至った。シドニーは、その歌の音節と押韻を忠実に守っており、詩の主題は、いかにもシドニーらしく、新プラトン主義的である。シドニーは、一五七七年オレンジ公訪問の際にこの歌を耳にしたのかも知れない。

九行 彼女 ここから、愛する女性と「自然が造った最も美しい光」とを同一視し、新プラトン主義的思想に則って歌う。

一一行 その最も大切な部分 恋する者の心のこと。

これらの不思議をイングランドは生み出すが、最後のものが残っている。

一人の貴婦人で、女性の性にも拘わらず、貞節そのもの。

彼女にはあらゆる愛が注がれるが、内には何の愛も安置されない。

そこでは、美しさが知性の引き締めた手綱に屈従している。

つつましい高慢、好意を汚す侮辱、

女の形をしているが、天使のように優美。

天使の心をもっているが、女の姿に作られている。

地上の天国、天国を中に含む大地。

さて、今や、私自身には、この不思議をこしらえよう――

彼女こそ、私が他の全ての不思議である原因である。

六五

七〇

### 第二三番

「ナツソーのウィルヘルム」の調べに乗せて

楽しい景色という果実で

自分の思いを満たした人は、

ここで、その眼を上へ上げ、

自然が造った最も美しい光を見よ。

五四行 生命をもつ鳥 カオジロガン (Canada goose) のこと。中世以来この鳥は老朽船につくバーナクル (Baracle) という貝から生まれるという伝説がある。それに因んで鳥自体も同名で呼ばれるようになった。この伝説は、マンデヴィルからローリーに至る旅行者たちによって一つの驚異として評判になった。

### 第二三番

この二三番から二六番までの四つの詩は、前の二三番の五九行目にある「欲望の死から、最も純粋な愛が飛び立つ」という考えを受け継ぎ、それを展開することによって、愛する者の弱状を解決しようとしていると思われる。

地上に残った木は、やがて消滅していくという。

土は、彼女の耳、杭は、私の願いごと。

願いごとのうち、その美しい御座にまで入り込めた部分は、  
名誉に変わり、以前の熱は消え失せてはいるが、

形はそのまま、名誉の巢の中に住まうことになる。

だが、恐れのため願ひ出ることができなかった部分は、  
自ずと衰え、意識が薄れて、死んでしまう。

四五

難破して、アルピオンの海岸に打ち上げられ、

岩の上で腐朽し、死滅していく船がある。

その木製の骨と、ピッチの血液から、

船が失ったよりも、より多くの生命をもつ鳥が飛び立つ。

五〇

五行 アルピオン 「白い土地」という  
意味で、グレート・ブリテン島、後には、  
イングランドの雅称。南部南岸白亜質の絶  
壁に因む名称。

私の船は欲望、長い間情欲の風に翻弄され、

変わらない貞節の美しい岩礁にぶち当たって、砕けた。

そこで、性急な企てゆえに災いを受け、息絶える。

美は、それほど深く、美徳の海の中に横たわっている。

だが、欲望の死から、最も純粹な愛が飛び立つ。

それは、劣っているように見えるが、より高貴な生命を動かす。

六〇

る」とある。



美の釣り針にかかり、夢中になって、私は、  
自分自身を、望まれるまま、解剖にゆだねたけれど。

胆嚢ではなく、心臓を彼女に与えたが、

それでも、色々の想いで胸蓋がれて生きている、彼女が、  
解剖でなく、征服者の権利で、私を殺そうと思うまで。

三〇

ピーク地方に洞窟があり、その狭い入り口をくぐると、

中には大きな空洞がひらけ、滴が激しくたたっている。

滴は、そこで、人知れず留まっているが、寒さで凍結し、  
その貧相な場所を、雪花石膏の内張りをして飾っている。

私の眼はその狭い入口で、広い空洞は私の心である。

その曇った様々な想いは、内なる雨となって

悲しみの滴をしたたらせる。すると、その落下する流れを、  
より冷たい理性がまとめ、不易の真実の水脈に入れる。

それは雪花石膏よりもはるかに純粹で、

軽蔑されても、いつも真実を守っている。

三五

野原がある。杭をその土の中に

深く打ち込むと、地中に入った部分が、

固く、冷たく、重い石に変わる。

四〇

三二行 洞窟 ピーク地方にあるこの洞窟は  
奇観を呈する鍾乳洞で、イングランドの不思議の一つ。イングリッド中部、マンチェスターの南東約三〇キロにある高台の保養地で温泉が湧出する町バクストン付近に存在する「プール石灰岩洞窟 Pool's Hole」を、シドニーは念頭においているのであろう。その低く狭い入口は、白い鍾乳石交りの大きな石灰岩の奇怪な形の洞窟に通じている。シドニーの叔父レスター伯爵は、温泉水を飲みにはしばしばバクストンを訪れている。シドニーは叔父からその洞窟のことを聞いたか、叔父に同行して実見したかも知れない。

四一〜四四行 ホリンシェドの『年代記』  
(*Holmsted's Chronicles*) の一五八七年度版の一三〇頁に「バース市の近郊にあるウィンバーン修道院の近くに美しい木が立っており、その木片を辺りの地中に刺すか、水中に投ずると、一年以内にそれが石に変わ

また、それが私の中で大きくなると、どうして単純な魂がこんな複雑な悩みを生み出すのか、どう考えても謎だ。

一〇

ブレレトン家の所領地には湖があつて、太陽が近づき、それを暖めると——そのときに限つて、神秘の深みから枯れた丸太を浮かび上がらせる。その進貢の儀が終わると、それは、屋敷の当主の最後の命の糸が紡がれた、悲しいしるし。

感覚が私の湖、その静かな水は決して流れない。

一五

しかし、私の太陽が、その双子座の光をそこへ向けると、彼女の中に生じた力によって、その感覚の深みから、久しく溺れていた希望を、水を含んだ眼へと浮上させる。

だが、それが私の死んだ希望を取り上げるのに失敗すれば、その主人は遺書を作るよう警告されても当然である。

二〇

わが国には、外国の人々が感心する魚がいる。

捕まえて、その体の主要な部分を惨酷な解剖にゆだね、

胆嚢を切り取り、また人の手で閉じ合わせると、

それでも、その生命が改めて要求されるときまで生きている。

いっそう不思議な魚である私自身は、まだ息絶えていない、

二五

期)の間に何回かにわたつて建造されたと推測され、古代の祭祀遺跡の代表とされる。シドニーは、実妹メアリの嫁ぎ先であるペンブルック伯爵家のウィルトン屋敷に寄寓したとき、この巨大石列柱を見物したかもしれない。

一―一四行 チェシャー州ブレレトン(Breleton)に所領地と屋敷を構えたブレレトン家に纏わるこの伝説は一九世紀まで伝わっていた。英国の考古歴史家ウィリアム・キヤムデン(一五五―一六三三) *Britannia* 六〇九頁に拠れば、「ブレレトン家の跡目(当主)が身罷る前には、屋敷に隣接する湖の中で、枯木の塊が数日間浮かぶのが見られた」という。ブレレトン家とシドニーとの個人的接点は知られていないが、シュロースベリーのグラマースタールかオックスフォードで学友だった可能性がある。

一六行 私の太陽 愛する女性をさす。双子座の光は、彼女の両眼の光のこと。

二―五行 外国の人々が感心する魚 カワカマス(Drigo)のこと。ドレイトン『多幸の国』(二一三三年)三卷二六―二七二行を参照。

光から離れることで盲目となり、その悲しみに疲れはて、

私は、その光の傍にいたくて、より大きな悲しみに帰っていく。

一〇

ちよとど、自分の小さな死骸を焼く光を好んで、

炎に向って飛んで行く夏の虫のように。

私は公平な選択ができる、盲目のモグラとして生きるか、

あるいは、焼かれた虫となって死ぬか。

## 第二二番

イングラランドの七不思議

麗しいウィルトンの近くに、巨大な石の列柱が見られるが、

ひどく入り乱れているので、どんな人の眼も、

その数を正確に数られないし、どんな人の理性も、

どんな力がそれをこんな思いがけぬ所に運んだのか説明できない。

私の心の荒地は、その石列以上に不思議な重荷へと縛られている。

その重荷は、空想の大地から立ち上がり、理性の天空を摩する

情欲の丘の群れで、あらゆる数量の限界を超え、

何処からこんな途方もない塊が私の中に飛び込んでくるのか、

五

## 第二二番

本詩の構造は、ペトラルカ『恋愛抒情詩集』一〇五番の流れを汲むもので、そのカントオーネの中でペトラルカは「新奇多彩な六つの物」——「不死鳥」、「金剛石」などに恋する自分をなぞらえる。シドニーの「七」という数字は、お決まりの世界の「七」不思議に由来し、読書・博識並びに観察・会話から仕入れたものらしい。

本詩では、奇数連と偶数連とが対になっていて、奇数連で紹介されるイングラランドの不思議な情景や事物が、偶数連で恋に悩む詩人の不思議な心の状態の比喩になっている。

一行「巨大な石柱の群」いわゆるストーン・ヘンジ。イングラランド南部のソールズベリ平原に立っている二重環列の巨大石柱で、前一九〇〇〜前一九〇〇年（新石器時代後

私の生命の一部、それも私がひどく嫌っている部分が、

生きていて、私の疲れた土くれの肉体に、息を分け与える。

しかし、あの善き部分、全ての慰安が宿る部分は、

今は死んで、別れはすなわち死であることを示している。

そうだ、死よりも悪い。死は、悲・喜両方からの別れだが、

私は、喜びから別れて、苦悩の中にずっと生きるのだから。

一〇

## 第二一番

私がいつも愛さずにはおれぬあの輝く光が

私の心を傷つけ、その傷を見て喜ぶことがわかったので、

少しの間、そこから離れているのが一番よいと思った、

遠い所にいれば、それだけ私の気が楽になるならば。

私の眼は、その全ての光明が住んでいる所から引き離されると、

たちまち盲目となり、暗い絶望の中に横たわる。

ちようど、地中深くもぐり、空が見えなくなり、

自分を導いてくれる視力を失ったモグラのように。

五

## 第二一番

愛する彼女から遠ざかるのは、光を失ったモグラになることに等しい、だからといって、光である彼女のもとに戻るのは、飛んで火に入る夏の虫のように、思いが叶えられず心が焼かれるような状況に晒されるといふ、二重拘束の恋人の状態を歌う。

理性との争いで、感覚に打ち負かされるから、あなたは、ますます美しく、ますます惨酷になっていく。

私は、誰をも愛さない愛人を一途に愛し続け、

屈従し抗い、苦痛に口付けし、それを呪う。

考え、理性、感覚、時、あなたと私は、依然として変わらない。

## 第二〇番 告別

しばしば、私は熟考したが、今やっとわかった。

死ぬ人々が「去って行く」と言われる、その訳が。

「去って行く」というのは、私の耳には大変穏やかな言葉で、

死の醜い投げ矢を描くには、弱弱しいと思えたのであった。

だが今、奇妙な軌道を辿る星たちが、私を拘束し、

私の心を預けている人からの別離を申し渡す。

私には、弱った盲目の魂が叫ぶ声が聞こえる、

この別れで、私の一番大切な部分と別れるのだ、という声が。

五

一五

### 第二〇番

原文では、part という音を二回使って、「部分」「別れる」、「分ける」などの色々な意味に用い、また「part」を含む「depart」（去って行く）や「impart」（分け与える）などの語を利用して、愛人からの別離の悲しみを歌う。この修辭的技法は、「patronomast」と呼ばれる「掛け詞、地口、語呂合わせ、言葉のしゃれ」で、特に、同音異義語を、例えば、以下のように利用する。「Here lies one who often lied before. But now he lies here he lies no more.」

病毒に汚された心は、見るもの全てを汚してしまふ、と。

第一九番

もし、こんな思いを止めるすべを考えつくことができたら、

あるいは考え続けて、私の考えがよい結果をもつなら、

もし、反逆的な感覚が、理性の法を受け入れるなら、

あるいは、理性が挫かれて、無駄な争いをしないのなら、

それなら、どんな考えが、考えるのに一番よいか、考えられよう。

それなら、巧みに泳ぐこと、あるいは喜んで沈むことができよう。

五

もし、あなたがその惨酷な心を変えてくれたら、

あるいは、常に惨酷な時があなたの美しさを汚してくれたら、

もし、この愛が私の魂から一度でも出て行くことがあるなら、

あるいは、私の愛人に代わる、別な愛人を得ることができたら、

それなら、あなたの助けにより、あるいは私自身の中で、

心の変化、あるいは慰めを見つけることができるであろう。

一〇

しかし、私の考えは、いつも考えることに費やされ、

第一九番  
第一八番と同じく、これも相関詩で、最後の行で要約される。

黒胆汁質は、女性に喜ばれるということを。

### 第一八番

いつもの散歩道なのに、いつもの印象が変わるのは、不思議な原因から生じる、何らかの原因があるのだ。私が眼を向けるもの、それぞれの中に、私の苦痛の一部が、彫り付けられているように思えるから。

岩は、節操の固い心のしるしであったのに、

今では、険しく聳え立ち、厳しい拒絶を示している。

木陰なす森は、今では、私の太陽を暗くするように思われ、堂々たる岡は、元気なく低く見えることを潔しとしない。

落ち着いた洞穴は、今は、落ち着きのない幻影をもたらし、

谷は、どちらを見ても、険しい上り坂ばかり。

刈られたばかりの牧草地のように、私は喜びを絶たれて生きている。

ああ、美しい小川も、私の涙で水かさを増している。

岩、森、岡、洞穴、谷、牧草地、小川は、私に答えて言う、

五

一〇

### 第一八番

自然の風景と恋する者の心的状況の相関を軸にした詩。「アストロフェルとステラ」の四三番と一〇〇番もこのような相関を軸にした詩。本詩では、「岩」「森」「岡」「洞穴」「谷」「牧草地」「小川」という自然の要素が次々に繰り出され、心的状況との相関関係が最後の二行で要約されるといって構造になっている。

蘇えらせ、あなたをただ物語の材料に使うだけで、  
自分たちは充分幸せ者だと思つてゐるのに。

三五

それでは、アポロの善き神よ、その弓を片付けよ。

今は詩作のときだから、豎琴を手に取り、歌いたまえ。

私の頭の中に、何か神聖な気分を溢れさせよ、

世の人々が皆、私の悲しみ、溜め息、涙を知るために。

ほれ、今私が詩作を始めようとしてゐるのが見えないか。

四〇

私は陽気だった——そうだ、どうして喜ばずにおれただろう、

ただ私だけが、無比の恋人を持つてゐるのだと、

自慢して当然と思えた、そのときに。

だが、今、私の顔が喜びで覆われているとすれば、

カルタゴ陥落のとき、ハンニバルが笑つたことを思いたまえ。

四五

美しい女よ、暗い表情をした者たちを

私と較べると、私がいかに軽薄な人間だと思われた。

冴えない顔色をして、禁欲主義者のように見える者、

自分の言葉に重みをつけるため、無理に沈黙する者、

地面を見ているため、その眼が清らかに見える者、

そんな者たちを信じてはいけない。眞の医学は知つてゐる、

五〇

四五行 ハンニバル Hannibal(247-183 B.C.)  
カルタゴの名將。生涯ローマと戦ひ続けた。  
第二ポエニ戦争(前二一八—二〇一)で、  
敵の意表を突き、ビレネーから冬のアルプ  
ス越えを敢行してイタリアに侵入し、ロー  
マ軍を壊滅させた。「ハンニバル来る」の  
言葉は、ローマ人の心胆を寒からしめ、長  
く諺として残つた。しかし、後にローマの  
名將スキピオ・アフリカヌスにザマの戦  
いで打破られ、小アジア方面に亡命し、自  
ら毒を仰いで絶命、カルタゴも滅亡した。  
ペトラルカ『恋愛抒情詩集』一〇二番、五  
〜八行に「ハンニバルもまた、運命に見放  
され／玉座から、ローマ打倒の目論見から  
きれいさつぱり足を洗つたとき／悲しみに  
呻いてゐる人々に向かって笑いかけた／彼  
の残酷な恨みを吐き出し放棄するために」  
とあるのを参照。  
四八行「冴えない顔をして」: in cloudy  
face. は「暗い服を着て」とも解せる。  
五二行 黒胆汁の性質の者は、暗い顔と陰  
鬱な性格を特徴とするとされた。『オール  
ド・アーケイディア』一―番ドロス之歌七  
〜一〇行に、「吐ぬかすな」と応じて「自  
然」、「これは全く些細なこと／運、不運を  
くれるは人間その人、心の操り方次第。／  
此奴の氣質を陰鬱な黒胆汁を熱して作るは  
私。／人生の悦びも此奴には悲哀となる」  
とあるのを参照。



おお、それはこうなのだ——優しい心の中でも、  
節のある藁が見つかり、些細なことが憎しみを生み出す。

たった一頭の馬が、トロイの地を荒廃させ、

ギリシャの三脚台が、開戦のラツパを鳴り響かせ、

ロバ一頭の影が、論争を引き起こしたこともある。

二〇

もし、ギリシャ人たちが、そんな小さな原因に心を動かされ、

それらの騒ぎを纏れさせ、元に戻すのに難儀したとしても、

美しい婦人方が、そんな厳しい慣習を守るべきであろうか。

そして、不機嫌の中に、いつまでも留まるべきであるうか。

私はそれを願わない。御婦人方の気性は繊細極まりないから。

二五

彼女は言う、私の手が、私の心の証しを立てていない、

私が私の生ける死と、果てしない苦痛を描く、

悲しい歌を作らないからだ、と。

愛神キューピッドの矢の傷みを味わっている者にしては、

私があまりに陽気な日々を送っていると、彼女は考えるのだ。

三〇

すると、詩人たちだけが、唯一真実の恋人というわけか、

彼らは、その心を詩の韻律に注いでいて、

チヨースーの愛人も知っていた、古い立派なもの悲しい歌を

いたギリシャ兵たちが忍び出て場内からトロイの門を開き、味方の軍勢を引き入れてトロイの城内を略奪・占領し、ためにトロイは落城して焼け野原となった。

一九行ギリシャの三脚台 戦争に取り掛かる前に、その道行を占うことを託されて、デルポイの神殿の巫女がそこからアポロの神託を述べた祭壇。

二〇行ロバ一頭の影 ロバを雇って旅をしていた男が、強い日差しをロバの影で避けようとした。すると御者は、ロバの影まで貸した覚えはないと言った、というデモステネス(Demosthenes, 384-322 B.C.)の寓話への言及。デモステネスはこの寓話を、アテネの人々が彼の演説を聞いて抱いた関心の平凡さを証明するために語ったとされる。プルタルコス『モラリア』八四八Aを参照。

第一七番

私の恋人は、顔をしかめて、私が愛してないと言う。

私は異議を申し立て、しかるべき奉仕を行い、  
遜って、一途な誠実の証を立てようとする。

しかし、それでも、彼女から取り除くことができない、  
私が不実かもしれぬという、根拠のない深い疑いを。

五

もし、宣誓が役に立つのなら、詩人たちの言う

神々も恐れるステイクスの川にかけて、誓言する、

私は愛の誓いを、決して捨てはしなかったと。

自から選んで奴隸になった私が、どうして

心に思う以外のことを、顔に表さねばならぬであろうか。

一〇

だから、私の詩神よ、知っているのはそなただけだから、

教えておくれ、謂れない悲しみの原因を、

教えておくれ、どんな悪意が、私の善行を辱めたかを、

教えておくれ、私の喜びと希望とが、いつも満ちていたのに、

どうして、こんなに減退し、ひどい引き潮になったかを。

一五

第一七番

あなたは私を愛していないという愛人に  
対して、それが不当な言い掛かりであると  
抗議する恋人のモノローグ。詩作に関して  
素人であると主張する（四〇行目）恋する  
男が書いたぎこちない旧式の詩を装っている。

七行 ステイクスの川 (The Styx) 冥界を七  
巻する三途の川。死者は渡し守カロンの船  
に乗せられて、この川を渡り死者の国に  
入ったとされる。神々はこの川にかけて誓  
いを立てる。オリュンポスの神々とティタ  
ンたちとの戦いが始まると、前者の主神ゼ  
ウスの呼びかけに真っ先に応じて、子ども  
たちともども味方したので、ゼウスはその  
報酬として、神々がステイクスの水につけ  
て建てた誓いは、決して破ることが出来な  
いように取り計らったという。

一七行 節のある薬 ラテン語の 'nodum in  
scilpo quadrare' 「灯心草に節を探す」 「欠点  
のないものに欠点を探す」という諺にひっ  
かけたもの。

一八行 一頭の馬 ギリシャ軍が敵を欺いて  
トロイの城内に入るのに用いた空洞の大き  
な木馬。知将オデュッセウスが神への捧げ  
物と見せかけてギリシャ兵を中に詰め込ん  
だ木馬をトロイに入場させるを思いいつ  
き、エピソードがアテナ女神の助けを得て  
建造した木馬の中から、夜になると隠れて

## 第一六番

かつて、あるサテュロスが、逃げ出した、

自分が吹き鳴らした、角笛の音が恐ろしくなつて。

恐れ、恐れられて、彼は彼自身から逃げたのだ、

自分が知らないものの中に、不思議な災いがあると思つて。

そういう謂れない恐怖心を、臆病な者たちが抱くと、

自分がほしいと望むものを避けるようになる。

その理由を問わず、どうしたら自分を救えるかだけを考えて。

落ち着きを捨てた、この哀れな獣のように。

ちようどそのように、私も、己の言葉について

己が抱く疑いのため、己の幸運を捨てるかもしれない。

起こるかもしれないものへの恐れから、

己が望む獲物を追跡する楽しみをやめるかもしれない。

親愛なるダイアーよ、私は君のサテュロスの方が好きだ、

美しく輝く火に口付けをして、唇に火傷をした奴の方が。

寓話。サテュロスはギリシャ神話に出てくる森の神で、酒神バックスの従者。半人半馬（時に、山羊）の姿で描かれ、酒飲み騒ぎと好色で知られる。ローマ神話のファウヌスと同一視される。

第一六番（a）

エドワード・ダイアー作

プロメテウスが、初めて高い天から、  
以前は地上で見たことのない、火を持って降りたとき、  
そばに立っていたサテュロスが、喜びの余りたわいなく、  
その火に口付けした、美味しいものようだったので。

たちまち、異様な焼き焦がす力を感じ、

その痛みに気が狂い、叫び声や、金切り声の悲鳴をあげ、  
川や野原、また木陰の中に、安らぎを求めた。

だが、当分の間、彼の苦痛は彼から離れず、ずっとついて回った。

それと同じく、私も愚か者、天上から来た天使の、  
人間の形をした見慣れぬ姿に

眼を楽しませていると、その印象が眼に焼きついた。

それ以来、私は、愛の意のままに、走ったり、止まったり。

違いは、サテュロスは昏に、私は心に、

彼はしばしの間、私は永久に、傷の痛みをもつということ。

五

一〇

ば、『ニュー・アーケイディア』第一巻に、「眼を縫い閉じられた鳩は、盲目であればあるほど、いや増しに高く飛ぼうとする」フランシス・ベーコン『随想録』の「野心について」に、「どんな人でも、そういう役割を演じるためには、眼を縫い閉じられた鳩みたいにならねばならない。辺りを見回すことができないうために、どんどん高く舞い上がるようになるわけである」を参照。

第一六番（a）

シドニーの友人エドワード・ダイアーによるソネット。次の一六番はそれに対するシドニーの返し歌。

エドワード・ダイアー (Sir Edward Dyer: 1543-1607) は、シドニーとともにエリザベス一世の宮廷の華であり、当時の人々から詩人としての評価を受けていたが、しかし、作品はほとんど残っていない。シドニーの遺書に「彼の蔵書をフルク・グレヴィル (Sir Fulke Greville 1554-1628) とダイアーとで分けて欲しい」と書かれている。外交使節として、オランダ、デンマークへ赴く。彼の現存する数少ない詩の中で、「My Mind to Me a Kingdom is」で始まる詩が最も有名。

一〇八行プロメテウスがもたらした火に口づけをしたサテュロスの話は、一六世紀に出版された『イソップ物語』に出てくる有名な

## 第一五番

*Non mi vuol e non mi trahè d'Impaccio* というペトラルカの

言葉を金言とする。脛を縫い閉じられた鳩の紋章について

脛を縫い閉じられ、飛び上がる鳩は、

自由になったのでもなく、忠義に縛られるのでもない。

高く昇れば、何か救いが得られるのではと期待はしたが、

やがて、力不足のため、地面に落ちて来ざるをえない。

そのように、私の心は愛神の導きの眼に捉えられ、

心地よい傷を受けたと思つたその場所から解き放たれたが、

生きる許しを与えられず、死ぬ定めでもなく、

病気のままでもないのでなく、健康になれるのでもない。

しかし、私の心はその空想の翼で、翔け上がり、

高い奇想を求めるが、しばしばその成果はほんの僅か。

やがて、心は、傷つき、盲いとなり、疲れ果て、

飛ぶ力を失い、どこに落ちるかも解からなくなる。

おお、幸せだろくに、鳩は、捕われの身とならなければ。

もっと幸せだろくに、私は、捕われの身のままで居られれば。

## 第一五番

本詩は、馬上槍試合で使われる楯に描かれた白と黒の素朴な図案に標語が添えられた *impresa* (紋章) に関する歌である。

*impresa* 製作の規則は、図案と標語の両方を考慮して初めてその意味が明らかになるというものである。紋章に描かれた脛を縫い綴じられた鳩の絵とそれに添えられた標語を見て、詩人は、その鳩と同様に生かしてもみえず、死なねばならぬでもない、恋の傷を負った自分の状態を歌っている。

‘*Non mi vuol e non mi trahè d'Impaccio*’ は、ペトラルカの『恋愛抒情詩集』一三四番の翻案で、「彼」(愛神)が暴君であると言つ。英語では ‘He does not want me and does not deliver me from trouble’ (彼は私を欲しがるのでもなく、また私を骨折し苦労から解放してくれるのでもない) の意。

ペトラルカ (Francesco Petrarca 1304-1374) は、イタリアの詩人・人文主義者で、永遠の恋人ラウラへの一途な愛を綴つた *Canzoniere* (1360) 三六〇篇は、とりわけ、シドニーやスペンサーを筆頭とする一六世紀後半のイングランドの詩人たちに大きな影響を与えた。

一行脛を縫いとじられた脛を縫い綴じるのは、鷹の訓練法の一部で、脛を糸で縫い綴じられた鳥は、方向感覚をなくして、疲れきるまで上方に舞い上がっていく。例え

第一三番

カトゥルスより

誰にともなく、私の女は言う、「あなたた以外の、誰の妻にもなりません。

たとえ、ジュピターに求愛されようとも、いやです」と。

このように女は言うが、熱烈な恋人への女の言葉は、

風か、水の流れの中に、書き留めるのが必然だ。

第一四番

美しい人よ、僕たちに恐れられないように、こよなく愛されるようになさい、  
多くの人に恐れられる者は、また多くの人を恐れる、それは真実だから。

第一三番

カトゥルス (Gaius Valerius Catullus, 84?-

54 B.C.) はローマの叙情詩人で、恋愛短詩や風刺詩などを得意とする。彼の現存する一一六篇の詩のうち、二五篇が人妻(クロディア)の激しくかつ不幸な恋愛を描いている。エレゲイア(哀歌)体の音韻詩である本詩は、カトゥルス七〇番を英語に移した初めての試みであり、その内容は、移り気な女の愛を風刺している。『オールド・アーケイディア』一一歌、ドロスの歌(「運命」(自然)愛)が私をめぐり長いこと争った／虫けらの私に最高の不幸を与えるのは何れかと」も参照。

第一四番

セネカ (L.A. Seneca, 4? B.C.-A.D.65) の悲劇『オイディプス』(Oedipus)の七五―七六行の英語訳で、原文の二二音節をエレゲイア体の音韻詩二行連句に直している。

シタールの楽器で目覚めさせ、弓を用いないこともある。

一五

厳しい状況では、毅然として、勇気を振るえ、

叡智に満ちた、落ち着いた人よ。

だが、風が強すぎるときは、ふくらんだ帆をたたむのだ。

一五行 シタール 一六〇七世紀に、特に英国で流行したりユート、あるいは、ギターに似た弦楽器のこと。

第一二番

*Rectius vines* で始まるホラティウスの詩よりの翻訳

あなたは、きつと、もつと安全に生きられよう、もし、いつも  
 荒海に乗り出したりせず、海の嵐を避けるときも、  
 備えの悪い海岸に、向こう見ずに迫り寄ったりしなければ。

中庸を愛する人は、恙なく平安に暮らす、  
 廢れた家の不潔さから免れて。また、静かに暮らす、  
 妬みがつきものの宮廷から開放されて。

風が最も害を加えるのは、しばしば、最も巨大な松の木である。  
 堂々たる塔は、壊れるとき、より激しく倒壊し、  
 最も高い岡をこそ、稲妻は引き裂く。

不幸な出来事は希望で満たし、幸運な出来事は  
 変化への不安で、充分覚悟のできた勇氣でもひるませる。  
 険悪な冬も、来たときと同じように、去って行くであろう。

現在と過去が、災いの罠にかかっても、  
 災いは長続きしないであろう。アポロは、眠れる詩神を

第一二番

本詩は、古代ローマの詩人ホラティウス  
 (Horace, 65-8 B.C.) の『歌謡』(Carmine) II  
 X の忠実な英語訳。原詩のサップフォー詩体  
 の各連を、三韻句法(ダントテが『神曲』に  
 用いた詩型 terza rima. 英詩では、通例、弱  
 強五歩格) aba. bcb. cde … の脚韻構造の  
 三行各連に転換している。  
 'Rectius vines' はラテン語で、英語では、'You  
 shall live better' の意。

五

一〇



## 第一一番

彼女が「おお、惨酷な苦痛よ」と言うのを聞いたが、

彼女は、自分の美しさがどんな姿をしているか、知っているのか。

彼女は本当に嘆いていて、他人は偽って嘆くと思っているのか。

彼女は感じることを恐れるが、他人の恐れは感じ取れないのか。

それとも、心は全ての苦痛に耐えうろと思っているのか。

重い大地は嘆くことができるが、燃える心はそれができないと、

眼は、血の涙を流して、心よりも、ひどく泣けると、

感覚は、感覚を包んでいるもの以上に、感じうろと思っているのか。

いや、いや、彼女は賢くて、よく知っている、自分の顔は

それが他人に与えているほどの苦痛をもたないことを。

彼女は知っている、その完全な場所の病気は、

それでも、私の生命を救えるほどの健全さをもつことを。

だが彼女はこう考える、我々の苦痛は高貴な理由が正当化するが、

苦痛を支配すべき彼女を、偽りの苦痛が辱めている、と。

一〇

五

第一一番

「苦痛」を主題とする四篇の連結ソネットの最後。

一三行 我々の苦痛は……正当化する 我々が味わう苦痛は、君の美しさを愛するゆえという正当な理由があるということ。

第一〇番

第一〇番  
「苦痛」の主題を歌うソネットの続き。

なんじ苦痛よ、忌み嫌われる監禁への唯一の訪問客、

呪いの子供、人間の弱さの預かり子、

悲哀の兄弟、苦情の父親よ。

なんじ苦痛よ、天国から追放された、憎まれ者の苦痛よ、

どうして、お前は彼女を離さぬのか。（監禁）もその眼を恐れ、

災いも祝福し、その弱さを美德の甲冑で固め、

他人の悲しみや嘆きを、貞淑に支えることが出来、

その美しい天空には、高貴な思想の天使が群がっている彼女なのに。

どんな不思議な勇気が、お前の卑劣な心を捉えたのか。

しばしば全ての人の心を貪り食らう顔を恐れぬとは。

それとも、天からの命令で、この役を演じているというのか。

だから、その神々の嫉妬には、どうしようもないというのか。

もしそうなら、ああ、あの部分が災いを受けている間は、

彼女の舌をとめてくれ、これ以上「いや」と言わないように。

五

五行 監禁 擬人法。

一〇

## 第九番

ああ、私に災いあれ、私に心痛を返してくれ。

私の燃える舌が、私の愛人に苦痛を与えたのだ。

私の苦しむ心は、苦しみの余り、苦しみに対して、

彼女を正當に称賛しながら、私の苦境を訴えたから。

私は称えた、決して運不運に動かされぬ彼女の眼を、

苦い返事も甘美にする彼女の息を

子供のような愛を育てる、彼女の乳白色の胸を。

彼女の脚を（おお、脚を）、いつも美しい足取りの脚を。

苦痛は彼女への称賛を聞き、内なる炎で胸をふくらませ、

（まず私の胸を彼の生け贄として封じ込め）

彼女のもとに飛んで行く。そして、欲望で大胆になり、

その盗賊は、（当代称賛的である）彼女の顔に口付けする。

おお、苦痛よ、私は与えた称賛を取り消す。

そして、誓って言う、彼女はお前を受けるに値しないと。

## 第九番

「苦痛」の主題を歌うソネットの続き。

五

七行子供のような愛 六番一行の「わが子、  
欲望よ」を参照。

一〇

第八番

次の四篇のソネットは、私の愛する貴婦人が  
顔に痛みをもったときに作られたもの

生への崇り、死のはなはだしき汚名、

地獄の煙、〈苦痛〉と呼ばれる怪物が、

長い間、彼の無作法な来訪に不満を持つ人々に、

至る所でのしられてゐるのを恥じて、

ちようど、自分の醜い悪を、他人の善の中に隠すことを

時と旅から学んだ悪賢い卑劣漢のように、

近ごろ、自然がその最高の贈り物をしまつておく

宝庫として造つた、彼女の顔の中に隠れた。

怪物は、美が輝き、徳が君臨する聖なる御座の特権で、

彼女が大きな称賛をえているので、

自分も、僅かでも、幾分かの称賛に与ることを期待する、

自分の惨酷な汚れを、彼女の輝きの中に包み込んで。

ああ、図々しい苦痛め、いつまでも過ちを続けるでない。

彼女は更に愛する人の目を惹き、お前は更に憎しみを買おう。

第八番

この八番から一一番までの四つのソネットは、いわゆる「連結されたソネット群」(linked sonnets)で、愛する貴婦人の顔を襲つた「苦痛」(pain)を主題にしている。  
二行 苦痛「歯痛」とする説もあるが、  
二行目の「残酷な汚れ」そして一〇番一行目の「忌み嫌われる監禁」からすると、「天然痘」のことかも知れない。

五

一〇

あなたの中では、全ての喜びが、実によく調和しているので、私の中で、心と魂が歌い出す。

天国を知った人たちは言う、

そこにどんな美しい光景が広がっているか、

それを見る恩寵をえた人はだれでも、

いつも歌いださざるをえない、と。

私には、まだその天国が、

あなたの顔に残っているのが、はっきり見える。

だから、私の中で、心と魂が歌い出す。

三〇

おお、美しく、優しい御方、あなたを見てみると、

あなたの中では、全ての喜びが、実によく調和しているので、

私の中で、心と魂が歌い出す。

優しい人よ、私が心安らかだと思っではいけない、

私の大切な部分が歌っているからといって。

この歌は、死の悲しみから生まれている、

ちように瀕死の病にある白鳥のように。

沈黙も、死も、

真実の愛の音楽を休止させることはできない。

だから、私の中で、心と魂が歌い出す。

四〇

三七行 白鳥は臨終の間際に美しい歌を歌うという伝説に言及している。

私の中で、心と魂が歌い出す。

あなたが聞くこれは、私の舌ではない。

舌は、かつて、私の思いを語ったが、

残酷できつい返事に突き刺され、

その働きを奪われた。

そうだ、舌は懲らされるのを恐れ、

上あごにくっついていてるけれど、

私の中で、心と魂が歌い出す。

一〇

おお、美しく、優しい御方、あなたを見ていると、

あなたの中では、全ての喜びが、実によく調和しているので、

私の中で、心と魂が歌い出す。

正しい調和は全てを音楽にするが、

あなたの中の正しい調和は他に勝り、

各部分が、互いに仲良くおさまり、

一が他から、互いに、美しさを受けとっている。

あなたの中に和合が住んでいると、

真実が、全ての人々に告げるので、

私の中で、心と魂が歌い出す。

二〇

おお、美しく、優しい御方、あなたを見ていると、

最後の一行がリフレインされ、原文では、その躍るような心情に相応するように、強弱格で書かれている。  
‘Se tu senora no dueles de mi, はスペイン語で ‘If you, Madame, do not grieve for me’, ‘If you, lady, have no pity on me’ の意。<sup>25</sup>

五

一五

## 第六番

*Basciami via mia* の調べに乗せて

眠れ、わが子よ、〈欲望〉よ、乳母の〈美〉が歌っている。  
 おお、赤ん坊よ、お前の泣き声が、私の頭を痛ませる。  
 赤ん坊は泣き叫ぶ、「ああ、あなたの愛がほくを眠らせない。」

眠れ、眠れ、わが子よ、〈希望〉の揺りかごは、  
 子供たちに、いつも十分な睡眠をもたらししてくれる。  
 赤ん坊は泣き叫ぶ、「ああ、あなたの愛がほくを眠らせない。」

## 五

私の赤ん坊よ、お前が眠れないのは、私のせいだから、  
 しばらく眠れ、〈満足〉のパン粥を今作っている。  
 赤ん坊は泣き叫ぶ、「いや、それが欲しくて、ほくは眠らないのだ」と。

## 第七番

スペインの歌 *Se tu señora no dueles de mi* の調べに乗せて

おお、美しく、優しい御方、あなたを見ていると、  
 あなたの中では、全ての喜びが、実によく調和しているので、

## 第六番

〈欲望〉(desire) という赤ん坊を寝かしつける子守歌の体裁を取る歌。同じ趣向を「雑歌」四番二〇一〜四行「嬉しそうな欲望よ、最近心に抱かれた客よ／まだ赤子の彼は、眼差しという乳で育てられ／吸えば吸うほどますます乳房を求め／飽くなく渴いた人々が常に飲んで常に渴くように」、あるいは、「アストロフェルとステラ」七一番一四行「だが、ああ、欲望はいつも叫んでいる、『何か食べるものが欲しい』と」で用いている。

*'Basciami via mia'* は、イタリア語で、  
 'Kiss me my life' の意。  
 九行「それが欲しくて」「それは欲望の満足」という食べ物のこと。

## 第七番

私に対して残酷な返事を与え、私の口を封じたあなたではあるが、あなたの美しく調和のとれた姿を見ると、私の心と魂が歌い出す、と語る愛人賛歌。各連一〇行で、四連四〇行からなり、各連の最初の三行と

だが、もうこれ以上言葉は要らぬ、たとえ言葉が語られても、私を破滅させるような言葉で語らないでもらいたい。

忠誠の義務よ、静かに。義務は破られねばならない、

もし義務が私を殺すなら。

二〇

だから、おお、お出でなさい、私も参ります。私を受け入れて。留まることで私を殺さないで。あなたの至福を隠さないで。その両腕のあいだ以外のところに、私を放って置かないで。

私に私の口付けをください。

おお、私の想いを養う美味しい糧、私の唯一の所有者、

おお、天国のような喜びを味わわせてくれる、私の天国。

おお、御婦人方の名誉となるために生まれた美しいニンフ、

私の宝物である貴婦人よ。

二五



## 第五番

おお、私の想いを養う美味しい糧、私の唯一の所有者、

おお、天国の喜びを味わわせてくれる、私の天国、

おお、御婦人方の名譽となるために生まれた美しいニンフ、

私の宝物である貴婦人よ。

私が先頃までに味わった、あの喜びは今どこにある、

いつも心の中に突き刺さる、あの眼差しは今どこにある、

決して浪費されたことのない、あの言葉は今どこにある、

復唱する人を傷つけるあの言葉は。

五

ああ、太陽をも醜いと思わせる、あの顔はどこにある、

どんな価値あるものも及ばぬ、あの歓待はどこにある。

あの物腰、歡喜、優雅さはどこにある、

どうして私たちは道をそれたのか。

一〇

おお、忌まわしい離在よ、私はお前の虜になった。

おお、私の言葉は空しく消え去り、私の栄光は滅びた。

おお、忠誠の義務よ、お前に私は命じられている、

いつも悲しんでおれと。

一五

詭弁。たとえ、凌辱であれ、愛を持つ方が、全く愛に恵まれないよりは、まだましと述べる。

## 第五番

本詩は、サッフオー風詩体 (Sapphic)

——レスボス島に生まれた前六〇〇年頃のギリシャの女流詩人サッフオー (Sappho) が用いた詩形——で書かれている。シドニーが書いた数少ない脚韻を踏む音韻詩の一つである。この詩では、愛人から離在ののち、再び彼女を心の糧として呼び求める。

ここに、嘆き悲しみの、もっと正当な理由があることを。

一〇

お前の大地はいま芽ぐみ、私の大地は色褪せ、

お前の棘は外側にあるが、私の棘は心臓に刺さっている。

ああ、彼女が持つ苦悩の原因は、他でもない、

テレウスの愛が、力強い手で、彼女に無理強いされたこと。

そのため、彼女は、心の力が全く萎え衰え、

いかにも女らしく、自分の意志が犯されたと訴える。

だが、私は、毎日懇願しているのに、

満足するものは、与えられず、

与えられるのは、更に私を嘆かせる種だけ。

持たぬことは、持ち過ぎているより、より大きな悲しみ。

二〇

おお、美しいフィロメラよ、少しは喜ぶがよい、

ここに、嘆き悲しみの、もっと正当な理由があることを。

お前の大地は今芽ぐみ、私の大地は色褪せ、

お前の棘は外側にあるが、私の棘は心臓に刺さっている。

神とされる) アレスの息子。アテナイの王パルティオンがテーバイの王ラプダコスと戦ったとき、パルティオンを助けたのが縁で、長女のプロクネと結婚し、長男イテュスを設けたが、トラキアを訪ねてきた義妹フィロメラに横恋慕して彼女を森の中の岩で凌辱し、丸一年の間幽閉した。フィロメラは自分が受けた非道をつづれ織りに織り込んで姉プロクネに送ることを思いつき、全てを知った彼女は妹を救出して復讐を誓い、息子を刺殺してテレウスから後継ぎを奪い、二人して息子の死体を切り刻み、その肉を調理してテレウスの食事として差し出した。食事後、フィロメラが入って来て、テレウスに、血塗れの子供の首を突きつけたので、事情を悟ったテレウスは、二人の姉妹を殺そうと追い掛けるが、プロクネは燕に、フィロメラは夜啼鶯に(この逆もある)変身して逃げようとしたとき、彼はやつがしら(thoopo)に変身して、これを追い掛けたという。

九行 フィロメラ テレウスの妻プロクネ(Poone)の妹。テレウスに凌辱され、そのとき口封じのため舌を切られた。のちナイチンゲールに変身して、夜通し嘆きの歌を美しく囀るといふ。

二〇行 持ち過ぎている フィロメラがテレウスによって凌辱されたことを、「過度の愛情を受けたもの」と見なすシドニー流の

時間よ、私の死ぬ時を早めよ。

空間よ、私の墓を根こそぎ破壊せよ。

火、空気、海、地、風聞、時間、空間よ、お前たちの膂力を示せ。二〇

ああ、私は、彼らの全ての援助から追放されている。

私は彼女のもの、そして死は彼女の不機嫌を怖がる。

死よ、みつともないぞ、お前は欺かれているのだ、

私は彼女のものでも、彼女は私を大切な宝と思ってはくれぬ。

#### 第四番

同じ調べに乗せて

ナイチンゲールは、四月の訪れによって、  
眠っていた感覚を完全に目覚めさせられ、

先頃まで裸であった大地が、新しい装いも誇らしく芽ぐむとき、

いち早く、棘を歌の本にして、彼女の悲しみを歌いだす。

そして、愁嘆にかき暮れて、

彼女の喉は、歌の調べで訴える、

どんな悲嘆が彼女の胸を押しひさぐかを。

テレウスの暴力に純潔を守ろうとする意志を踏みにじられたのだ。

おお、美しいフィロメラよ、少しは喜ぶがよい、

五

#### 第四番

義理の兄テレウスに凌辱され、その事実を彼の妻で彼女の実姉プロクネに告げるこゝが出来ないように舌を切られて隔離されたアテネの王女フィロメラが、やがて事実を知った姉と画策してその息子を殺害し、その肉をテレウスに食わせて、凌辱の復讐を果たした後に変身したといわれるナイチンゲール(夜啼鶯)が本詩の主題。次の注も参照。この物語に關しては、オウィディウス『変身物語』巻六、四二四行以下に述べられている。

古典詩人たち、エリザベス朝の詩人たちはしばしばナイチンゲールの物悲しい歌声に言及するが、シドニーの一例としては、『オールド・アーケイディア』七五番、六一行以下「おお、ピロメラ、恥辱と悲嘆に打ちひしがれし胸で／助けて、わたしが慟哭するのを助けて欲しい／決して癒されぬ呪われし危難を。／おまえの悲痛の旋律が全く絶えたのならば／わたしの嘆きに静かに耳を傾けるのだ／世の人々に愁訴を教えたい気分だから」を参照。

四行 刺を歌の本にして 定旋律 (plain-song) に対する随唱(対位法)旋律 (prick-song) をさしている。同時に、ナイチンゲールは夜眠らないように胸に刺を当てて鳴くという言い伝えにも関連させている。

八行 テレウス (Tereus) トラキアの王で(軍

第三番

*Non credo già che più infelice amante* の調へに乗せて

火は、私の受けたひどい仕打ちを見て、怒りに燃え、

空気は、私の苦悩ゆえに、雨となつて涙を流し、

海は、深い悲しみゆえに、上げ潮を引き潮に変え、

地は、憐憫の情で、もの憂く、宇宙の中心に閉じこもる。

風聞は、驚異を伴つて、触れ広められ、

時間は、悲しみのゆえに、走り去り、

空間は、仰天して、じつと動かない、

明日のない、不幸に満ちた、私の夜を見て。

ああ、彼女だけが、私の惨めな有り様を知つても、

何の憐情も抱かず、純潔で、しかも残酷。

私の破滅が彼女の榮譽。

だが、いつも、彼女の眼は、私の炎に燃料を降り注ぐ。

火よ、私を焼き尽くせ、焼けつく感覚が消えるまで。

空気よ、もう、私に、苦しみの息を吸わせるな。

海よ、お前の中に溺れさせ、私から屈な生命を奪い取れ。

地よ、この土塊を取り去れ、その中で私の魂が思いやつれている。

風聞よ、私は生まれなかつたと言え。

第三番

シドニーはこの詩を『ニュー・アーケイディア』第三卷一五章で用いている。ここでは、王位簞箒を企む野心家の母に唆されて反乱軍を統率するアムフィアロス王子が誘拐・幽閉しているフィロクレア姫（アルカディア国王パシリオスの次女）への恋慕を歌い、「五器のヴィオールと同じ数の歌声」の合奏で演奏された。本詩のイタリヤ風の詩情は人気を博した。

*Non credo già che infelice amante* はイタリヤ語であり、英語で言えは「I do not believe a more unhappy lover.」これ以上に不幸せな恋する者はいない」の意。

一～四行 万物を構成する四大元素、「火、大気、水、土」は、詩創作の着想を生み出す素材として好んで用いられた。本詩は、第一連、第二連共に相関的構造で作られ、二〇行目で総括される。

四行 土 (earth) 鈍く乾いた「土」は四大元素の中で最も重く、中世医学では四体液のうちで、「憂鬱・陰気・物思い」を誘発する黒胆汁質 (melancholy humor) に対応する。

## 第二番

愛神キユセツドが、高飛車な態度をほしいままにして、奢りたかぶり、

私を、彼の膂力の見せしめにせんとの覚悟を決めたとき、

例えば、敵が、その知力を恐ろしい意地悪にひたすら傾注し、

しばしば、より身に沁みる苦痛を感じるような殺し方をするように、

彼は、美で武装して、眼に映る外観に容易に屈服する

そのような感情をただ単に支配しようとするだけではない。

美徳を高く掲げるので、理性の光も、

どれほどがこうと、捕われの身となるほかない。

ために私は、体の主要な部分が全て痛み、ひどく麻痺し、

死ぬための手数料を払うために、生きているようなもの。

夢に醜い怪物を見せられ、呻き声や

恐怖の発作でしか、助けを求めることができぬ人に似ている。

手にしたいと望みながら、欲するだけの才覚をもたない、

飢えた心に与える、愛神のご馳走とは、そんなもの。

## 第二番

愛神に屈服した語り手／詩人が愛ゆえの  
懊悩を訴えるソネット。

第一番

苦痛を避けても、安楽を決して見出せぬから、  
 内気な畏怖心が、私が傷つくのを知りつつ、その場所を求めぬから、  
 意志は征服され、ふさがれた耳も魅せられるから、  
 力は力を失い、見ることで盲目になってしまうから、  
 長く緩めば緩むほど、いつそうきつく縛ることになるから、  
 裸の感覚が、武装した理性に打ち勝つことができるから、  
 恐怖で凍えている心臓が、氷で暖まるのであるから、  
 詰まる所、相争う想いが、心を傷つけるだけであるから、  
 おお、愛神よ、ひどく嫌いなそなたの軛に、私は屈する、  
 だが、それも、武勇の掟を頼んでのこと。その掟は教えている、  
 手荒な仕打ちを受け、それで牢を破った者は、  
 正当に放免されたのであり、名誉に違反するものではないと。  
 だが、私の看守が好ましい看守なら、  
 私はそなたを主君とし、誓ってそなたの奴隷となるう。

一〇

五

第一番

このソネットは、次の二番のソネットとともに、詩人が愛神の力に屈服していく次第を描き、この詩集の序論的役割を果たしていると思われる。そして、それと対応するように、愛からの別離を歌う三十一番と三十三番のソネットがおかれていることに注意すべきである。  
 一〜七行これらの矛盾語法の言葉はペトルルカ以来恋愛詩の伝統的修辭法で、愛の相反する二つの性質を描いている。例えば、『ロミオとジュリエット』でも「鉛の羽根、明るい煙、冷たい炎、病んでいる健康」（一幕一場一八六行）などの同種の表現がある。  
 三行 オデユッセウスの部下たちが耳穴を蠟で塞いでセイレンたち（ギリシア神話に登場する上半身は人間の女、下半身は鳥の形をした怪物。南イタリアのソレントから遠くない島に住み、妙なる歌声によって、付近を通る船人たちを暗礁に引寄せては難破させ、えじきにした）の誘惑的な美しい歌声を聞かないようにしたことになぞらえている。

サー・フィリップ・シドニー作  
『サー・テウソン・ソネット短詩選集』

村里好俊・大塚定徳\*  
訳・注解・解説論文

\* 鹿児島大学名誉教授